2016年度フィリピン・スタディツアー報告書

Republic of the Philippines

～知っているようで知らなかったフィリピン～

名古屋学院大学
国際文化学部国際協力学科
外国語学部国際文化協力学科

2017年3月

名古屋学院大学
国際文化学部国際協力学科
外国語学部国際文化協力学科
フィリピン・スタディーツアー報告書

Republic of the Philippines

～知っているようで知らなかったフィリピン～

2017 年 3 月

目次

はじめに　佐伯奈津子……4

第一章　スタディツアー概要

フィリピン概略……8
スケジュール……9
お世話になった方がた……10
参加者……11

第二章　訪問先の記録

低所得層地域　ナボタス　池谷けいと、岡本大介、真神ベアトリス…14
カンルンガン～ストリートチルドレンの避難所～　山本良介、横江勇哉……18
JICA フィリピン事務所　磯田将成……20
オルター・トレード社（ATC）　斉藤匡平……22
ネグロス島～砂糖農園での体験記～　古川茜、清水侑未……24
イカウアコ～環境と生活の両立～　榊原寿成……27
JICA ×南城市による協力　山本大輔……29
マリガヤハウス　崔月、葉政廷……31
忘れてはいけない戦争　野田健斗……33
これがアテネオ大学だ！！　藤綱ひなの、兵藤璃香……35

第三章　参加者の感想

多くのことを学んだフィリピン～感じた異文化と人との交流～　野田健斗……40
フィリピンの歴史と人びと　斉藤匡平……42
２年前と比べたフィリピン～後悔と発見～　榊原寿成……44
印象フィリピン　崔月……46
パンフレットには載っていないフィリピン　古川茜……48
わたしを変えたスタディツアー　清水侑未……50
ストリートチルドレンと出会って　山本良介……52
讀萬卷書不如行萬里路的菲律賓～百聞は一見にしかず～　葉政廷……54

元農園労働者の生活と民衆貿易と幸せと　横江勇哉…… 56
はじめてのフィリピン訪問　藤綱ひなの…… 58
はじめてみる発展途上国　兵藤璃香…… 60
明確に目の当たりにした格差　池谷けいと…… 62
フィリピンを訪れて気づいたこと　礒田将成…… 64
新しい宗教、文化、生活に触れてみて　真神ベアトリス…… 65
わたしが感じた日々の綴り　岡本大介…… 66
フィリピン、知らなかった現状　山本大輔…… 67

第四章　ホームステイ先より

わたしの日本の娘へ　Maria Cristina M. Golez & Ma. Paz Cordura… 70
日比ホームステイ見聞録　Maria Lina Gonzaga…… 72
隔たりに橋を架ける　Nenia P Coronel…… 77
第２の故郷より　YAP Family…… 78
あなたたちのフィリピンの家より　Elaine Bobel Montelibano…… 79
２人の社会的関心への気づき　Regio & Caria Sales, Gally & Joselia Oropel… 80
新しい２人の家族　Bernie & Andrie Granada…… 82
日本の息子を迎えた３日間　Tessie G. Jalandoni…… 83

資料　報告会の記録　…… 86

おわりに　佐竹眞明…… 88

はじめに

本書は、名古屋学院大学国際文化学部国際協力学科・外国語学部国際文化協力学科が 2016 年 8 月 16 日から 29 日にかけて実施したフィリピン・スタディツアーの成果報告書である。ツアーは、本書の「おわりに」を執筆した佐竹が全体を企画し、佐伯がその補助を担った。ツアーには、両学科の 1 ～ 3 年次学生 16 人が参加している。

学生たちは、春学期の事前学習を通じて、フィリピンの概要、訪問先であるマニラ首都圏やネグロス島北西部の政府機関・民間団体による国際協力について調べたうえで、14 日間の実地学習に旅立った。

スモーキーマウンテンやストリートチルドレンについて、中学・高校時代に耳にしたことのある学生のなかには、自分の目でみてみたいという気持ちと、自分はなにもできないのに興味本位で行ってもいいのだろうかという不安があったようだ。しかし、実際にマニラ首都圏の低所得層地域を訪れた学生たちは、おそらく日本の学生には想像できなかったであろう環境で、多くの困難に直面しながらも、前向きに暮らしを営む人びとから暖かく迎えられることになった。

マニラ首都圏では、アジア太平洋戦争時、日本軍兵士による性的暴力を受けたロラ（おばあさん）たちからも話を聞いた。フィリピンでは、とくに日本兵による強制連行（拉致）と強姦のケースが多かったと指摘されている（秦郁彦、林博史、吉見義明など）。70 年以上前の体験を涙を流しながら訴えるロラたちは、自身の権利を取り戻すため、いまも絶望せずに闘っていた。

青々とした水田、見渡す限りのサトウキビ農園、水浴びするカラバオ（水牛）――。渋滞と排気ガスにいささか苦しめられたマニラから移動してきた学生の目には、豊かな自然の広がるネグロス島は「天国」のように写ったかもしれない。しかし、ネグロス島は、スペインによる植民地支配以来、その農業・経済を砂糖生産に依存しており、1985 年の砂糖価格暴落時には農園労働者が失業、「飢餓の島」と呼ばれるほど深刻な飢餓が発生した地域である。ネグロス島で学生たちは、モノカルチャーや大地主の土地所有から抜け出て、経済的な自立、持続可能な農業をめざす農民たちと出会った。

詳細は、本書の報告をお読みいただきたいが、ツアーで一貫して学生が学んだことは、さまざまな異なる問題を抱えながらも、それを克服していこうとするフィリピンの人びとの力強い姿だったのではないだろうか。

実は、学生からは、もっと多くの実践を体験したかったという声も出された。しかし、この出会いこそが国際協力実践のはじめの一歩だと、わたしは考えている。

たとえば、目の前の貧しい人に寄付しても、残念ながら貧困問題は解決できない。その人を貧困たらしめているのはなにか。差別など社会的な問題があるかもしれないし、植民地支配など歴史を理解しなくてはいけないかもしれない。政治や経済に原因があるかもしれない。貧困を生み出す構造を理解することは、貧困問題の解決には不可欠だろう。

また、その貧しい人が漁網を必要としているのに、魚や現金、農具を支援しても喜ばれないかもしれない。国際協力でもっとも大切なのは友人になること。国際協力の現場で活動し、このよ

うに考える民間団体は少なくない。友人であれば、本当に必要としている支援を知っているだろうし、相手の迷惑になってしまう支援はしないはずだからだ。

つまり、今回のツアーで体験したマングローブ植林だけでなく、人びとに出会い、その話を聞き、かれらの直面する問題を知ることも、国際協力の実践である。そして、ツアーの終了、報告書の完成が、学生にとって、さらなる国際協力実践のスタートになることを期待したい。

最後になるが、多くの人びとの支援がなければ、このツアーは実施できなかった。とくに、低所得層地域の人びと、性的暴力の被害女性、そしてネグロス島の農民たちに受け入れてもらえたのは、KPAC（金光教平和活動センター）、リラ・フィリピナス、ATC（フィリピン・オルター・トレード社）といった民間団体が、これらの人びとに長いあいだ寄り添う活動をされてきたからである。深く感謝の意を表したい。

2016 年 12 月

佐伯奈津子

第一章　スタディツアー概要

フィリピン概略

1. 面積　29 万 9404 平方キロメートル（日本の約 8 割）、7109 の島じまがある
2. 人口　1 億 98 万人（2015 年フィリピン国勢調査）
3. 首都　マニラ（首都圏人口約 1288 万人、2015 年フィリピン国勢調査）
4. 民族　マレー系が主体、ほかに中国系、スペイン系およびこれらとの混血ならびに少数民族
5. 言語　国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語および英語、80 前後の言語がある
6. 宗教　国民の 83%がカトリック、その他のキリスト教が 10%、イスラームは 5%
7. 平均寿命　男性 69.5 歳、女性 73.9 歳（フィリピン国家統計局）
8. 識字率　95.6%（2008 年調査フィリピン国家統計局）
9. 大学進学率　約 30%（職業訓練専門学校レベルのものを含む）
10. 元首　ロドリゴ・ドゥテルテ大統領（2016 年～）

略史

14 ～ 15 世紀　イスラームが伝わる
　イスラーム王国スールー王国誕生
1521　マゼランの到着
1571 ～ 1898　スペイン植民地
1901 ～ 35　アメリカ植民地
1935 ～ 41　独立準備政府
1941 ～ 45　日本が占領（太平洋戦争）
1946　独立

スケジュール（2016 年 8 月 16 日～ 29 日）

	日付	曜日	内容	宿泊
1	8 月 16 日	（火）	9:35 中部国際空港→ 12:45 マニラ国際空港（PR473 便） 市内見学　リサール公園、イントラムロス	マニラ Pension Natividad
2	17 日	（水）	午前　国際協力機構（JICA）フィリピン事務所訪問 午後　Kanlungan sa ER-MA 訪問 （元ストリートチルドレンの支援）	同
3	18 日	（木）	午前　モール・オブ・アジア 午後　アテネオ・デ・マニラ大学訪問（プレゼン、交流）	同
4	19 日	（金）	午前　金光教平和活動センター（KPAC）の活動紹介 午後　ナボタス訪問（住民にお話を伺う）	同
5	20 日	（土）	マリガヤハウス訪問（活動紹介、JFC 母子に話を伺う）	同
6	21 日	（日）	午前　Lila Pilipinas 訪問（戦争被害者にお話を伺う） 夕方　エバリュエーション	同
7	22 日	（月）	8:20 マニラ国際空港→ 9:35 バコロド・シライ空港（PR2131 便） 午後　オルター・トレード社（ATC）訪問	バコロド Sugarland Hotel
8	23 日	（火）	ドン・サルバドール・ベネディクト町　砂糖・バナナ農園訪問 パンダノン統合バランゴン農民連盟	同
9	24 日	（水）	バゴ市　砂糖農園訪問 ナカラン・パディリア農場労働者連盟 夕方　エバリュエーション	同
10	25 日	（木）	シライ市　イカウアコ事業地訪問（活動紹介、マングローブ植林）	同
11	26 日	（金）	ビクトリアス市　JICA 草の根技術協力事業「沖縄県南城市モデルを活用したビクトリアス市アグリビジネス／アグリエコツーズム強化プロジェクト」視察 夜　会食後、ホームステイ先へ移動	シライ市のホストファミリー宅
12	27 日	（土）	ホームステイ先との交流	同
13	28 日	（日）	ホームステイ先との交流 夕方　エバリュエーション 夜　会食	シライ市 Richmond Inn
14	29 日	（月）	10:15 バコロド・シライ空港→ 11:30 マニラ（PR2132 便） 14:00 マニラ→ 18:55 中部国際空港（PR438 便）	

お世話になった方がた　Acknowledgments

Konkokyo Peace Action Center（KPAC）　金光教平和活動センター
　Ms. Harriet Escarcha
国際協力機構（JICA）フィリピン事務所
　浅田恵里さん（NGO デスク）　　片木真理子さん（青年海外協力隊員）
Kanlungan sa ER-MA
Ateneo de Manila University　アテネオ・デ・マニラ大学
　Dr. Karl Ian Cheng Chua, Director, Japanese Studies Program　　Dr. Hiroko Nagai (JSP)
デセンプラーナ悦子さん（4 日目の通訳）
Maligaya House
　河野尚子さん
Lila Pilipinas
　Ms. Rachelda Extremadra, Executive Director
　Ms. Narcisa Claveria, Ms. Esterita Dy, Ms. Felicidad de los Reyes（戦争被害者）
Altertrade Corporation
　Ms. Gilda S. Caduya, Presidenta, Ms. Ella Joan Molina Macatangay
IKAW-AKO
　後藤順久さん（代表）
　倉田麻里さん（プロジェクト・マネジャー／レキオウィングス現地駐在）
　川瀬理恵さん　（インターン）
中里みかるさん（青年海外協力隊員）

Host families in Silay City　ホームステイ
　Ms. Maria Christina Golez, Ms. Agnes Lacson Partisala, Ms Tessie Gaston Jalandoni,
　Ms. Elaine Bobel Montelibano, Ms. Maria Lina Gonzaga, Ms. Andrei Cuaycong Granada,
　Ms. Geraldine Javelona Yap, Ms. Nenia Parrenas Coronel, Ms. Fritzie Cuevas Jison,
　Ms. Ma. Paz Medorocillo Condura, and Ms Quimpo Sisters

名古屋学院大学　国際センター
　長瀬賢俊さん　　稲葉諭香さん

参加者

参加学生（16 名）

3 年　外国語学部国際文化協力学科

野田 健斗	NODA Kento
斉藤 匡平	SAITO Kyohei
榊原 寿成	SAKAKIBARA Hisanari

2 年　国際文化学部国際協力学科

崔 月	CUI Yue
古川 茜	FURUKAWA Akane
清水 侑未	SHIMIZU Yumi
山本 良介	YAMAMOTO Ryosuke
葉 政廷	YEH Cheng-Ting
横江 勇哉	YOKOE Yuya

1 年　国際文化学部国際協力学科

藤綱 ひなの	FUJITSUNA Hinano
兵藤 璃香	HYODO Rika
池谷 けいと	IKEGAYA Keito
礒田 将成	ISODA Masanari
真神 ベアトウリス	MAGAMI Beatriz
岡本 大介	OKAMOTO Daisuke
山本 大輔	YAMAMOTO Daisuke

引率教員（2 名）

佐伯 奈津子	SAEKI Natsuko
佐竹 眞明	SATAKE Masaaki

第二章　訪問先の記録

低所得層地域　ナボタス

池谷けいと（IKEGAYA Keito）
岡本大介（OKAMOTO Daisuke）
真神ベアトリス（MAGAMI Beatriz）

事前学習ではフィリピンでの低所得層における給与格差、ストリートチルドレンなどを重点的に調べてきた。

まず、フィリピンのおもな職種ごとに月の給与を平均して並べてみる。

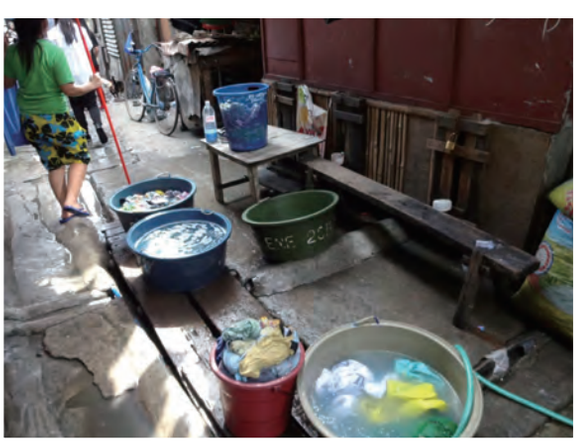
・教育関係　約 2 万ペソ（1 ペソ＝ 2.1 円なので約 4 万 2000 円。2016 年 10 月現在）
・CA　約 1 万 2500 ペソ（約 2 万 6250 円）
・看護士　約 4900 ペソ（約 1 万 290 円）
・郵便関係　約 4500 ペソ（約 9450 円）

数字だけみると、日本では考えられない格差ができてしまっている。またフィリピン各地でよくみられた自転車移動のタクシー「トライシカド」についてバスガイドの方に話を聞くと、儲かって月に 1000 ペソ（約 2100 円）いけばよいほうだという。

農村地区から職を探しに出てきた人たちが都市部、マニラへと行くが、そう簡単に職はみつからないのが現状だ。その生活におけるストレスから子どもを手放す人が続出し、ストリートチルドレンが増えてしまったひとつの原因であると考えられている。

フィリピン渡航後、ナボタス市にある低所得層地域を訪問した。家と家、人と人が密集した場所で、歩道は下水の上に舗装してあるせいか生活水の匂いがあちこちに充満していた。

わたしは、妻アナベル・ベラスコさん（34 歳）と夫アントニオ・ボルボアさん（55 歳）のご夫婦を訪ねた。子どもは 9 歳（小学 2 年生）のナルド君、3 歳のローズマリーちゃん、9 か月のジョニー君だった。そのうちの上の 2 人の子どもは、アナベルさんが以前一緒に暮らしていた人とのあいだにもうけた子どもだ。アルコール中毒とアナベルさんへの過度の DV で別れたそうだが、フィリピンでの法律上離婚するのは簡単なことではないらしく、籍は入れたまま、事実婚として現在の夫アントニオさんと暮らしている。



アントニオさんは、ナボタス漁港で魚の運搬をする仕事をして生活している。収入は約 1 日 400 ペソ、約 840 円程度。生活するので手一杯だそうだ。家は約 4 畳ほどの大きさ、電球一つで十分の広さだ。フィリピンでは政策として、貧困層向けに条件つき現金給付（CCT、4Ps ともいう）がある。子どもが学校に通う、母親が病院で検診を受けることが条件である。しかしこの家族は給付を受けることができない。多大な書類の準備と前の夫のサインが必要だ

からだ。そのため苦しい生活に対する補助を受けられない。

しかしロドリゴ・ドゥテルテ大統領が就任してからは毎日安全に暮らしていると笑顔で話してくれた。日本のメディアでは否定的なことしか流されないのに対し、現地の人たちは幸せになったと言っているので驚いた。毎週のように麻薬犯が処刑されていくそうだ。その影響で極悪犯罪、強姦のような事件が激減したという。そのように話してくれたお母さんの顔はとても輝いていた。（岡本大介）

ナボタスに着いてまず、小さいチャペルに案内された。そこでナボタス住む 2 人の女の子がダンスを披露してくれたり、体をつかうゲームをして遊んだりした。それからナボタスのコミュニティー内のツアーに出かけた。かなりもろいつくりの家が間隔なくひしめきあっていて、洗剤の匂いが充満していた。

それからファミリー訪問では、ドナリンさんという 2 児のお母さんの話を聞いた。

ドナリンさんのお宅は、トラック運転手の夫ランセルさん、恥ずかしがりな女の子ラニャンちゃん、元気で甘えん坊な男の子ナタニエルくんの 4 人家族である。

夫ランセルさんは 35 歳でトラック運転手をしている。一度仕事に出ると約 1 週間は会えないという。ランセルさんのトラックは鉄鋼や動物の飼料を運んでおり、自宅と現場の一往復ごとに 300 ～ 500 ペソ（日本円で約 620 ～ 1050 円）の収入がある。家族を養うためによく働いてくれているそうだ。

妻であるドナリンさんは現在専業主婦である。結婚前は、日本企業の縫製工場で働いていた。2004 年ごろ、収入は残業代込で 1 週間 1 万 3000 ペソ（日本円で約 2 万 7300 円）。月曜日から土曜日まで 8 時間の労働をしていた。そのころに夫のランセルさんに出会ったそうだ。当時、ランセルさんは彼のおじを頼ってマニラに出てきていた。彼のおじは鉄の切断の工場を営んでおり、そこで彼は手伝いをしていたそうだ。その工場がドナリンさんの工場と隣同士だったのがきっかけだったと話してくれた。

また夫婦の性生活については、IUD という避妊用具をヘルスセンターから配布されて使用していたが、いまはストックがなくなってしまったため、自分で計算していると言っていた。夫のランセルさんもフィリピンでは珍しいらしいが、自分でコントロールしていると言っていた。

娘のラニャンちゃんは現在小学 1 年生である。朝 5 時に起床し、7 時には登校しているそうだ。ドナリンさんは、朝食を食べさせて、ビスケットやジュースをサリサリストアなどで買

い与えて、ペディキャブという乗り物で片道 7 ペソ（日本円で約 15 円）で毎日送り迎えをしているそうだ。200 ペソ（日本円で約 420 円）の制服は少ない収入から買ったものである。ラニャンちゃんも息子のナタニエルくんも大学まで通わせたいと言っていた。

家は、2 万 5000 ペソ（日本円で約 5 万 2000 円）で購入した。現在はドナリンさん一家と、彼女の兄の家族が一緒に住んでいる。また、洪水によって 1 階部分がつかえなくなっており、かなり狭い一部屋に家族 4 人で暮らしている。

4 Ps（世界銀行 WB やアジア開発銀行 ADB などの国際機関の支援を受けて 2008 年以来、フィリピン政府が貧困削減政策の一環として取り組むもの。https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/2512）については、知ってはいるが受け取っていないそうだ。義妹と彼女の母は 4 Ps の受益者であるが、どのようにして 4 Ps を受け取るのかわからない、インタビューをしに来るようだが基準が分からない、と言っていた。

アキノ前大統領と比べて、新しいドゥテルテ大統領については、麻薬の取り締まりが厳しくなるのはいいことだが、麻薬を使用していなくても疑われた市民が殺されるのは怖いと思っているそうだ。わたしたちがナボタスを訪ねる前日、バスケットゴールの下に覆面をつけられた若者の遺体が 3 体置かれていたそうだ。警察が強い麻薬取り締まり制度のもと、3 人を殺したとみられている。そのバスケットコートでは、前日にそんな怖い事件があったとは思えないくらい少年たちがバスケットボールを楽しんでいた。頻繁に起こっているために、ナボタスの人びとがそのような事件に慣れてしまっているのでは、と思った。

生活はつねに大変だとは思うが、子どもが熱を出したり、風邪をひいたりしたときは心配になると言っていた。ナタニエルくんが生後 8 カ月のとき、熱を出して病院に 1 週間入院したそうだ。また生活していて幸せを感じるのは、家族で教会やプラザ、モールに行くときや、家族に健康上の問題がないことだと言っていた。

お金の面では生活は苦しいことばかりでも、家族のことを話すドナリンさんの笑顔はとても幸せそうだった。（池谷けいと）

わたしたちは、マリリン・マンチェッタさんの家に行きお話を聞かせていただいた。マリリンさんは現在 38 歳で、出身はアンティポロ（フィリピン北部ルソン島カラバルソン地方の都市で、リサール州の州都）。現在は主婦をしている。夫は 33 歳、溶接工の仕事をしていて 1 日の収入が 350 ペソ（日本円で約 735 円）である。

家の家賃は 1 カ月 1500 ペソ（日本円で約 3150 円）である。子どもは 3 人で 14 歳の男の子、12 歳の女の子、9 歳の女の

子がいる。そのうち 9 歳の女の子は KPAC の支援を受けている。KPAC は、国連ミレニアム開発計画（MDGs）が進める普遍的な初等教育の達成（2015 年までに、すべての子どもたちが、男女の区別なく、初等教育の全課程を修了できるようにする。http://www.konkokyo.or.jp/kpac/philippines/）を支持し、マニラ市、マラボン市、セブ島マンダウェ市で就学前教育、青少年教育を実施している。また、さまざまなネットワークを通じ、活発に情報交換と子どもの教育に関するスキルアップをおこなっている。

子どもたちの将来の夢について聞いてみたところ、長男は芸術家、長女は美容師、次女は先生になりたいという。4Ps（岡本・池谷報告参照）については　2800 ペソ（日本円で 5880 円）を 2 カ月に 1 回受け取っている。そのつかい道は子どもたちのおやつ、おこづかい、自分たちの食べ物だ。生計を立てることが一番大変、家族みんなといるときが一番幸せとおしゃっていた。お金に困ったときは近所に借りていて、近所同士みんな仲良しである。

新しい大統領については、「結構いい」と評価している。毎日麻薬の売人を捕まえにくるから、売人がいることを知ることができた。また、パトロールもあり、夜 10 時以降子どもは外に出ては行けないようになった。そのほかに心配ごとはなにか聞いてみたところ、台風がきたときに家が倒れないかが心配だそうだ。（真神ベアトウリス）

カンルンガン～ストリートチルドレンの避難所～

山本良介（YAMAMOTO Ryosuke）
横江勇哉（YOKOE Yuya）

わたしたちは８月 17 日に、フィリピン・スタディツアーのプログラムの一環として、1988 年にフィリピンの首都マニラで設立された、ストリートチルドレンの保護と社会復帰を目的とした NGO 団体、「カンルンガン・サ・エルマ（Kanlungan sa ER-MA）」を訪問した。

ストリートチルドレンとは文字どおり、住む家がなく、路上で物乞いや物売りなどをして暮らしている子どもたちのことである。ストリートチルドレンはフィリピンをはじめ、世界各国の発展途上国に存在する。

アメリカ合衆国国際開発庁 (US-AID) によれば、ストリートチルドレンは以下４つのカテゴリーに分類される。

①住む家がなく、家族からの支援もない子ども
②家はあるが定期的にしか帰宅せず、ほとんどの時間を路上で過ごしている子ども
③家族自体がホームレスであり、家族とともに路上で生活している子ども
④保護されているが、路上生活に舞い戻る可能性がある子ども

ストリートチルドレンにいたるおもな原因は、貧困だと考えられる。そして、家族全体の収入が少なく家計を助けるため、日中から働く子どもたちや、親の低収入によるストレスから虐待や育児放棄を受けた子どもたちが、みずから路上生活に陥るケースもある。仕事に関しては、物売りなどのほかに、スリや窃盗などの犯罪もおこなうこともある。

カンルンガン・サ・エルマはフィリピン・マニラの、そのような状況下にある子どもたちを支援している。団体名であるカンルンガンとは、タガログ語で、「避難所」、「安全地帯」という意味であり、エルマとはマニラに２つある地区「エルミタ」と「マラテ」を指す。カンルンガンはフィリピン政府からの資金援助こそはないが、フィリピン政府、社会福祉開発省（DSWD）の認可を得ている。

カンルンガンのおもな目的は、ストリートチルドレンの保護、教育、ヘルスケア、そして愛情を与えて社会復帰させることである。そのため、カンルンガンを卒業したあとにも、社会で生活していくために、社会学習や職業訓練もおこなわれている。カンルンガンを卒業した子どもたちの職業訓練を目的としたコーヒーショップや、農園などの施設もある。

カンルンガンは保護したストリートチルドレンを教育するため、”Street Education Program” というプログラムをおこなっている。

子どもたちははじめに、人、物事の結び付き、健康教育、危機管理能力などの最低限の知識や一般常識を、レクリエーション活動などにより、身につける。学習に関しては、わたしたちがカンルンガンを訪問した際に、屋上スペースに机と黒板があったため、そこで勉強を教えていると考えられる。そのほかには、形式ばらない教育として、スポーツや遊びなども提供しており、子どもたちの有意義な生活にも貢献している。

そしてこのプログラムでは、ストリートチルドレンの暮らしの向上とともに、子どもたちの家族・両親の向上も目的としている。母親同士のコミュニティを形成し、有効性のあるトレーニングやセミナーをおこなうことで、子どもたちに対する虐待やネグレクトの解消につながる。このプログラムは、これまでに約 600 人の子供と 400 の家族に対し実施された。

このほかには、Open Day Center や Tunasan Community Center という施設もある。Open Day Center では、正式に保護されていない路上の子どもたちが、オープンデイセンターを訪問することで、スタッフが子供たちに適切な食事や健康管理、危機管理などの教育を与える。また、こちらにもスポーツや遊びも用意されおり、子どもたちのゆとりの助けになっている。約 20 ～ 30 人の子どもたちがこのセンターを日々、訪問している。

Tunasan Community Center では、母親コミュニティを形成し、それに対して、基本的な社会、健康サービスの提供を除いて、子どもたちの母親をトレーニングやセミナーとともにサポートする。それにより、母親としての存在意義が高まる。

上記で述べたように、カンルンガンは一つの団体でさまざまな活動をおこなっている。保護された子どもたちは、年齢、性別、その子どもの環境ごとに、子どもたちが生活する施設が異なっている。それを Residential Care and Training Center（RCTC）と呼ぶ。ここでは、子どもたちの居住地が 2 つのレベルごとに分けられている。

レベル 1　施設に保護されて日がたっていない子どもたちが住む施設。子どもたちに必要な健康管理や精神カウンセリングなどをおこなう。

レベル 2　Girl and Boy's Home　さまざまな理由で家族と再会できない、またはできていない子どもたちが生活する施設。その施設で、子どもたちが共同生活を営む。また、子どもたちは学校にも通い、成績優秀者は大学進学の機会を得ることができる。

近々 30 年にもなるカンルンガンの活動は、現在では世界 7 カ国、9 つの団体に支援されているとは、驚きである。この 9 つの団体の一つに、ストリートチルドレン支援事業型 NPO である、日本の AWPS（Association of World Peace Support）という団体がある。

AWPS の活動の一つに、「チャリティー自動販売機」いうものがある。この活動は、わたしたち消費者が、その自動飲料販売機から通常の価格で飲み物を購入することで、1 本につき 3 ～ 10 円ほどの利益がカンルンガンの活動へと寄付されるというものである。この事業により、年間約 200 万円がカンルンガンに送金されている。このチャリティー自販機は（株）Suntory、（株）KIRIN、（株）アサヒ飲料の協力のもと、日本全国に約 200 台以上が設置されており、駅や学校などのわたしたちが生活のなかで、日々利用するような場所にも多く設置してある。なお、チャリティー自動販売機の特徴として、チャリティーステッカーやカンルンガンの子どもたちが描いた絵や手紙が掲示されている。

このように、わたしたちも日本にいながら、カンルンガンの子どもたちの支援をすることが可能であることが分かった。それどころか、わたしたちも日常の生活のなかで、すでにカンルンガンなどのストリートチルドレンへの寄付や援助をおこなっていたかもしれない。これを読んでいる読者の方々も、もしカンルンガンだけでなく、世界中のストリートチルドレンに同情の念を抱いていたなら、積極的に支援をしてほしい。

JICA フィリピン事務所

礒田将成（ISODA Masanari）

スタディーツアーの２日目、国際協力機構（JICA）フィリピン事務所を訪れた。まず青年海外協力隊の片木真理子さんのお話を伺った。青年海外協力隊事業は、2015 年で発足 50 周年を迎え、フィリピンへは 1996 年からの累計で 1700 名以上が派遣されている。

片木さんは現在シキホール島でデザインの支援をおこなっている。日本でいう小企業の支援などをおこない、デザインを提供したり、サンプルをつくったりしている。だが実際は全部が順調なわけではないという。現地の方の技術が低い、働いてる人が趣味の延長でしかない、離島なだけに物価が高い、販売へのモチベーションが低いという問題点がある。トレードフェアをしたが、素人の販売の仕方がわからない。島のブランドを活かしてグッズを売ってもみたが、マーケットが限られるのでなかなか続けられない。お金はほしいが現状に満足しているところがあるのでうまくいかず、どうモチベーションを上げてやっていくのかが課題とおっしゃっていた。片木さんのことばには、ボランティアをしていても絶対役立つとは言えないが、支援に行ったからには感謝されたいという強い気持ちも込められていた。わたしたちはもう一度ボランティアとは何なのか、という点をしっかり理解しなければいけないと感じさせられた。

次に NGO デスクの浅田恵理さんから、JICA について伺った。

JICA の正式名称は「独立行政法人国際協力機構」、設立は 2003 年 10 月 1 日、職員は 1842 名（2014 年 3 月末時点）である。政府開発援助（ODA）を実施する政府機関だ。

ODA の予算は民間企業や国民の税金で成り立っている。なぜ税金をつかってまで途上国を援助するのか。それは貧困、紛争、エイズなどのたくさんの地球的規模の課題があり、それらを解決するために ODA を通じて貢献や途上国の発展を手助けすることで途上国の安定につながるとともに、地球的規模の課題の解決になるからだ。広い視野でみたとき、途上国の安定と繁栄は日本の安定と繁栄に繋がっているといえる。

ODA には、技術協力、有償資金協力、無償資金協力がある。技術協力は、技術を提供する人を通じた協力で、地域の人材育成や制度構築のために日本の技術、技能、知識を途上国の人びとに伝えることだ。専門家やボランティアを派遣している。有償資金協力では、大規模なインフラが建設されている。たとえば道路や橋、地下鉄などの建設のため、一定水準以上の途上国に対して、長期返済、低金利の条件で資金を貸し付けている、その国と中長期にわたる安定的な関係を構築することができるという。無償資金協力では、基礎インフラの整備や医療品機材の調達がなされる。たとえば学校や病院を建てるなど、その地域のニーズに合わせた協力となっており、外交効果が高い。

フィリピンにおける支援分野は以下のとおりであ

る。
・運輸インフラ　フィリピンではマニラにすべてが一極集中しているため、マニラの都市化、とくに深刻化する交通渋滞に対応するべく、立体交差の道路や軽量鉄道の建設など日本の技術を活用するなど、全体的な支援を展開している。深刻な渋滞のため、日系企業はあまりフィリピンに展開していないことや、道路、空、海の渋滞により 1 日で 19 億ペソも損失しているので迅速な対応が必要だという。
・災害リスクの軽減・管理　洪水・地震津波・防災に関する設備。実際わたしも経験した洪水が一番の課題と感じた。スコールが起きると道路が浸水してしまう。ナボタスを訪れたときも、困っている点として水の浸水があげられていた。
・農業・農村開発　フィリピン国内の農林水産業従事者は、国内の就労人口の割合で約 3 割であるいっぽうで、国内総生産では約 12% のシェアしかない。貧困が削減し、すべての人が恩恵を受ける開発を進めるには、農林水産業従事者の所得向上の必要や農業インフラ整備やコミュニティの開発が必要である。なおフィリピンが日本の支援で培った稲作技術で、アフリカを支援している（南々協力）。

浅田さん自身もフィリピンの発展のために案を出し合っているとおっしゃっていたので、わたしたちもフィリピンの問題や現状についてを多くの人に伝えて、相互理解ができるようになりたいと思った。

オルター・トレード社（ATC）

斉藤匡平（SAITO Kyohei）

オルター・トレード社（ATC）はネグロス島で農家の人々に農業の指導やオルター・トレード・ジャパン（ATJ）に砂糖やバナナを輸出している会社で、1987 年に設立された。

ネグロス島はフィリピン全砂糖生産の 6 割を占めている砂糖の島である。1985 年に世界で砂糖の国際価格が暴落し、ネグロス島の砂糖農園で働いていた人びとは収入がなくなってしまった。飢餓状態の人びとが続出した。NGO 団体の日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC、現 APLA）が 1987 年、その状態を回復させるため、日本に現地でとれた無農薬砂糖（マスコバド糖）を輸出しはじめたのが、ATC のはじまりである。

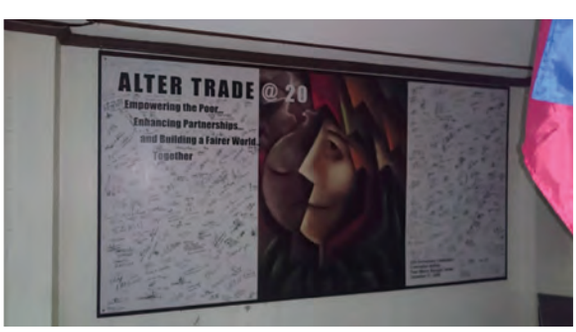
ATJ は、バナナやエビ、コーヒーなどの食べ物の交易をおこなう会社である。現在、食生活をはじめとし、わたしたちの生活はあらゆる部分で世界の人びとの生業や暮らしと密接につながっているが、その交易を支配しているのはごく少数の機関や企業だ。ATJ は生産と消費の場をつなぐ交易を通じて、「現状とは違う」、つまり「オルタナティブ」な社会のしくみ、関係をつくり出そうと設立された。JCNC の活動を基盤に、生協や有機農産物の販売グループ、市民団体が共同出資してたちあげた草の根の貿易会社だ。

フィリピンでは長い植民地としての歴史のなかで、主食の米をつくっていた水田までサトウキビ畑となり、とくにネグロス島はフィリピン全砂糖生産の 6 割を占める砂糖の島となっていた。ところが、砂糖の国際価格の暴落のため砂糖労働者の仕事がなくなり飢餓状態に陥った。JCNC は、緊急支援のために、積極的に日本国内でキャンペーン活動を展開しはじめた。

活動を進めるなかで、食料や医薬品の配布という緊急援助だけでなく、中長期的な視野にたった援助活動が必要であるとわかったことから、砂糖労働者が自分たちで食べる米や野菜を栽培することを支援する復興プロジェクト、水牛を送るキャンペーン、さらに、砂糖労働者に農業の知識を普及するための農業研修センターを建設する資金集めに取り組んだ。

支援活動を続けるうちに、ネグロスに厳然として存在する構造的暴力のなかで、今日食料を届けたとして明日はどうなる？という問題があることに気がつく。新しい援助のかたちとして、ネグロスの人びとが自分たちでつくったものを日本側で公正なかたちで買おうと、「マスコバド糖交易」がはじまる。マスコバド糖はネグロスで伝統的につくられていた黒砂糖だ。

ネグロス島の市民組織は、市民による市民のための流通機構を実現することを目指した ATC という名前の会社を組織し、JCNC などの協力を得て、このマスコバド糖を日本の生協などに販売することを実現した。日本に次いでヨーロッパの市民団体も輸入を開始した。こうしてマスコバド糖の輸入販売にはじまった草の根貿易の試み、ネグロス島市民との直接的な交流を通して、これらのことに関わった人びとは第三世界の人びととのオルタナティ



ブな関係をつくることの重要さを確認しはじめた。そしてそれまでの商社とはちがう、オルタナティブな、そして自立した民衆貿易をおこなう機関として、1989 年、株式会社である ATJ が生み出されることになった。

現在、ATC は、農民団体などに農業の仕方を教えている。また、水牛の貸し出しなどで持続的な農業の促進をうながしている。また、あらかじめ注文を受けてできた果物や野菜などを箱に入れて村へ届けている。値段の変動は基本的にない。

ネグロス島～砂糖農園での体験記～

古川茜（FURUKAWA Akane）
清水侑未（SHIMIZU Yumi）

砂糖の島ネグロス

フィリピン・スタディーツアーも半分が終わり、8日目と9日目はネグロス島の砂糖農園とバナナ農園を訪れた。わたしたちが訪れたネグロス島という島は、フィリピンの砂糖総生産の約6割を占めているため「砂糖の島」とも呼ばれている。ネグロス島のサトウキビからとれる粉末の黒砂糖はマスコバド糖という。日本にも輸出されているマスコバド糖は、家庭で使用される以外にもお菓子やパンなど、さまざまな加工品にも利用されるようになっている。

そもそもネグロス島が「砂糖の島」になった理由は1855年にさかのぼる。当時貿易商社で働いていたニコラス・ローニーというイギリス人がサトウキビをもち込んだのがはじまりだった。ヨーロッパでは砂糖が需要の高い商品であり、宗主国だったスペインからの入植者がネグロス島の広大な土地を所有し、砂糖農園を拓いた。ネグロス島に住む人びとは、土地なし労働者として不当な賃金でその日暮らしをしていかなければならなかった。

砂糖危機

1898年の米西戦争により、フィリピンは、330年近く続いたスペインの植民地支配からアメリカの支配下に置かれることになった。1902年アメリカ統治がはじまった。そしてアメリカ政府は1909年にフィリピンの砂糖産業に対し、特恵関税制度（フィリピンの砂糖を国際相場よりも高い値段でアメリカに輸出、つまりアメリカが高い値段で砂糖を買う。フィリピンに対しての優遇措置）を適用した。それにより1920年代には「シュガーセントラル」と呼ばれる近代的な製糖工場が次つぎと建設・操業をはじめ、水田までがサトウキビ畑に転換されていった。

しかし1974年に特恵待遇に終止符が打たれ、フィリピンは唯一かつ最大の輸出市場を失う。そしてそれに追い打ちをかけるようにして起きたのが1980年代の砂糖の国際価格の暴落である。海外市場への輸出を目的にしたモノカルチャー経済、サトウキビのみをたくさんつくるという構造的問題が背景にあった。20万人以上いた砂糖労働者のうち6万人以上が失業。十分な食料を与えられない子たちが飢餓により、たくさん亡くなった。当時「ネグロス島で飢餓が発生し14万人以上の子どもが死に直面している」というニュースが世界中に流れた。

農地改革

農地改革とは地主の土地を政府が買い上げ、自分の土地をもっていない砂糖労働者や労働農業者に売り渡すことである。つまりスペインの統治時代から続く小作・地主関係をなくし、小作人に土地を分け与え「農民が農業をする」政策である。なぜこのような政策をするかというと前述したとおり、地主が特権階級層として富を独占しているいっぽうで、労働者は低賃金でその日暮らしを強いられているという大きな格差があるからだ。労働者の生活を改善させるための政策が

必要だったのだ。独立後、現在までに４つの農地改革が成立している。

1955 年	農地改革法	共産化を恐れる米国政府の後押しあり。地主勢力が支配する議会で骨抜きにされた。
1963 年	農地改革法	国会審議の段階で、地主階級に有利になるよう修正された。
1972 年	小作農解放令	共産党と新人民軍（NPA）の影響力拡大に対し、当時の大統領が打ち出した。米とトウモロコシに限定され、７ha 以下の地主を対象に。
1988 年	包括的農地解放法	現行法。作物別の限定がなくなり、砂糖キビ農園も含めたすべての農地が対象に。

訪れた２つの農園

わたしたちは８月 23 日にドン・サルバドール・ベネディクト町バランガイ・パンダノン、24 日にバゴ市バランガイ・ナカラン・パディリアの農園を訪れた。バランガイとはフィリピンの最小末端の行政組織である。この２つの農園は、おもにサトウキビを育てているが、ほかにもバナナや米、レモングラスなどの作物も栽培していた。どちらも広大な土地をのびのびとつかって自然のなかで作物を育てている印象だった。

○バランガイ・パンダノンの農園

PIBFA（パンダノン・インテグレイテッド・バランゴン農民連盟）を 46 人で 2006 年に結成し、現在まで 21 人のメンバーで活動を続けている。このメンバーのうち 16 人が農地改革の適用を受け、自分の土地を所有している。サトウキビが 36 ヘクタール、バランゴンバナナは 8.5 ヘクタールの農地で育てている。個人で畑に植える作物を決め､土地の管理も各個人でおこなう。農地は、３年間有機肥料での農業を続けると有機認定を受けることができる。この認定を受けると、フェアトレードプレミアムという資金を受け取れる。オルター・トレード社（ATC）はフェアトレード認証を受けたマスコバド糖をヨーロッパの NGO などに販売している。それらの NGO は品物の代金とは別に生産者組織や地域の開発のためにつかわれる資金＝フェアトレードプレミアムを支払う。PIBFA もプレミアムを受け取り、メンバーと組織に分けて、分配している。組織ではプレミアムをつかってトラクターを購入した。また PIBFA は 27 ヘクタールが有機認定を受けている。PIBFA の最終的な目標は生産量および収入を上げ借金をなくし自立した生活を継続してくことである。

また ATC からの支援でより自立した農業が可能となった。2014 ～ 2015 年に ATC から PIBFA が 100 万ペソの貸付を受け取ったり、収穫した農産物を ATC がおこなっている BOX という活動のもと販売したりしている。また天候や有機肥料などの農業をするうえで必要な知識を学ぶセミナーやリーダーシップ、金銭管理の指導もおこなっている。

PIBFA のメンバーの一人であるマカオさんによると、自分の

農地をもてたこと、ATC や行政（フィリピン水牛センター）の支援によって貧困から抜け出せた実感があると語ってくれた。いまでは生活に余裕のあるときは人を雇うこともあるそうだ。なおコーヒーの多国籍企業ネスレがコーヒーの供給獲得を目指して、コーヒーの木の苗をパンダノン農園に 2000 本提供したという。多国籍企業の手はこの農園にもおよんでいるが、一部農家は、あくまで一収入源としてこの苗を受け取った。

農場ではバナナの花を取り除いたり、要らない枝（孫と呼ばれる 3 本目の枝）を鉈で切ったり、サトウキビの葉を切ったりという体験をした。これらは実に栄養を集中させるための仕事だ。またバナナの実には虫や病気から守るためひとつずつ丁寧に袋掛けもされていた。これは日本に輸出するバランゴンバナナのみにおこなっている。

○ナカラン・パディリア農園

NAPFA（ナカラン・パディリア農業労働者連盟）を 37 人で 2006 年に結成し、現在では 62 人まで増えた。メンバーには妻や子どもも含まれている。37 ヘクタールでサトウキビ、2.5 ヘクタールで米、1.95 ヘクタールでレモングラスを栽培している。農地改革で地元の地主から土地所有権を取得したのは 2014 年だった。NAPFA は集団経営のため、何を植えるかなどは組織で決めていく。

2007 年に ATC とパートナー関係を結び、化学肥料や農薬をつかった農業から徐々に有機栽培へと転換していった。化学肥料や農薬は購入費用がかかるうえ、年々その量を増やしていかなければならない。除草剤などの農薬をつかうことで病気になるメンバーもいた。いっぽうで有機肥料はバナナの葉やカラバウ（水牛）の糞などからできているため費用がかからない。農薬もつかわないので、人間の健康と環境にもやさしい農業ができる。ATC に 2007 年～ 2009 年まで ATC の技術や組織運営の指導を受け、有機認定を受けることができた。さらに 2015 年～ 2016 年、120 万ペソの貸付を受け取った。

有機認定を受け、得られた資金でミーティングをおこなったりする集会所の修理やトラックのメンテナンス、農機具の購入、メンバーの社会の保険の支払い、文房具の購入などに充てることができた。また子どもの教育も小学校までしか送れなかったのが中学・高校まで通わせることができるようになった。

農場は、急斜面や水路がところどころあり、みてまわるのに苦労したが、景色もよく空気もおいしくリラックスした気分になれる場所だった。また鶏や猫、犬が放し飼いされてのどかな雰囲気だった。途中山羊の親子にも遭遇した。

この 2 日間で訪れた農場の人びとは、たくさんの果物と食事を振る舞ってくれた。あれも食べなこれも食べな、もっとおかわりは？というふうににぎやかにもてなしていただき、たいへん楽しかったしおいしかった。農地改革を経てどのような支援を受け、どう改善されていったか、ということを直接本人たちから聞くことができてよかった。また自然にあふれるフィリピンを知ることができてよい思い出にもなった。

イカウアコ～環境と生活の両立～

榊原寿成（SAKAKIBARA Hisanari）

特定非営利活動法人イカウアコ。イカウアコとはフィリピン語で「あなたとわたし」という意味である。フィリピンのネグロス島でマングローブ林や熱帯高地林の植樹事業をおこなっている環境 NGO である。1997 年に活動を開始。1997 年にネグロス島でマングローブの植林をおこない、2009 年にはボホール島でも植林活動を開始した。

フィリピンには 40 種類のマングローブがあるが、イカウアコではブンガロン、パガパット、バカウの 3 種類のマングローブを植えている。2015 年までに目標である 100 万本は植えられている。わたしたちの植林体験では、バカウという種類を植えた。場所はシライ市バランガイ・バラリンである。マングローブは沿岸に住む民家を津波や高波、強風、海岸浸食から守る役割を果たしている。バラリンの沿岸部では見渡す限り、マングローブ林が広がっている。20 年前には何もなく、やっとここまでなったという。

わたしたちは、イカウアコ植林・農業技術指導員の Argie Villarenia さんと日本の大学を休学して来ているインターンの川瀬理恵さん、バラリン・マングローブ植樹者連盟（BAMPA）の Cristina J. Diamante さんの指導のもと 180 本植えた。しかし、100 本植えても大きくなるのは 20％くらいである。なぜなら、海からのゴミが引っかかって成育を妨げられたり、カニが幼葉を食べたりするためだ。そのためゴミを取り除くなどのメンテナンスが重要である。

マングローブは古くから舟の材料、家の柱、定置網の杭、炭の原料、屋根材料として利用されてきた。マングローブ林にはカニ、エビ、貝なども集まり、人びとの食料源にもなってきた。1970 年代からマングローブはエビ養殖や薪の原料として伐採が盛んになった。そのため、1981 年にマングローブに属する樹木の伐採禁止が法律で定められた。また、1991 年にはマングローブ林の養殖池への転換が禁止された。それでもマングローブの伐採は止まることはなかった。そこでイカウアコは、1997 年よりマングローブ植林をはじめたのである。そして、マングローブ林ができると魚やカニが獲れるようになった。いまは 40 人でバラリンの見張りをして、マングローブの違法伐採をみつけたらバランガイに連絡をする。逮捕される人もいる。敷地内で薪として伐採している人もいるが、BAMPA が取り締まっているそうである。

なお、BAMPA という団体は 1990 年にシライ市のプロジェクトとしてできた。BAMPA は 30 人のメンバー構成で 30 人は海で生計を立てている。船のない人は沿岸で定置網を仕掛けて魚やカニ、エビを捕まえる。マングローブが増えてきたため漁獲が増え、収入も増えたそうだ。漁獲によるが、朝に漁に出て夜 10 時までいるときもある。1 日 500 ペソの収入になる。魚の買い付け人もくるが、市場にもっていき買ってもらうそう

だ。ガソリン代が 200 ペソなので、300 ペソの収入になる。

イカウアコの植林体験はネグロス島シライ市のエコツアーともなっている。植えつけ地に向かう途中、浅瀬のマングローブ林のあいだに築かれた竹でできた 600 メートルの橋を渡った。この橋はパナイ島からの竹で太くて質がよい。

イカオアコはネグロス、ボホールに拠点を置く。おもな活動は森林再生、植林、マングローブ植林、農村地区での収入創出計画（income generating project）だ。山間部と海岸部が密接につながっているため、植林とマングローブ植林を一緒にしている。2016 年はスタディツアーを除いて 4 万本が植樹目標である。そして、CSR（企業の社会的責任）としてイオン、ニチバンが出資してくれたという。イオンの助成では 2000 本植えることができた。また、いろいろな学生が 5000 本植えた。山間部は 3 カ所植えている。8 割は果樹、20％はふつうの木である。6 月から 12 月に植える。1 月から 5 月は乾季で苗が育ちにくいため植樹しないそうだ。

シライ市の山間地区パタッグではたい肥を作って野菜、果物をつくっている。無農薬でつくるのは 3 年前からはじめた。無農薬でバナナもつくり、オルター・トレード社を通じて日本に輸出している。

日本ではあまり体験のできないことばかり体験させていただき、佐竹先生や佐伯先生、そして、イカウアコの方がたに感謝するばかりである。今後もできる限りの支援をしていきたい。自分たちが植えたマングローブがどうなったかみてみたいので、数年後にはフィリピンに帰りたいと思う。

JICA ×南城市による協力

山本大輔（YAMAMOTO Daisuke）

JICA は現在ネグロス島ビクトリアス市で、沖縄県南城市や南城市の NPO 法人「レキオウィングス」と協働で、「沖縄県南城市モデルを活用したビクトリアス市アグリビジネス／アグリエコツーリズム強化プロジェクト」をおこなっている。

ビクトリアス市のあるネグロス島は砂糖産業に依存しているため、1980 年代の砂糖危機では多くの人が飢餓の危機に瀕した。またフィリピンは、市が所有する土地を細分化して小規模農家に譲渡したが、農家は狭い土地でのサトウキビ栽培はできないため地主に返還したりした。

ビクトリアス市は、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への危機感も加わり、砂糖依存からの転換を最優先事項とし、「アグリエコツーリズム」を筆頭に、6 つの開発優先課題を掲げている。「アグリエコツーリズム」とは、ビクトリアス市の自然環境や、導入されはじめている有機農業などの地域資源を最大限活用し、有機農作物の栽培・加工、直売所やレストランでの販売や観光農園など農業の 6 次産業化を図りつつ、自然公園などのブランド化やプロモーションをおこない、観光地化して人を呼び込むことを目指すものである。

一部の農家は、有機栽培グループを組織し、生産拡充を目指しているが、質・量・マーケティングともに不十分で、マーケットの需要を満たせず収益が上がっていない。そのため、不安定で低収入な砂糖依存の生活から、野菜などの高付加価値な有機農産物の栽培・加工などへの転換を目指し、農産物の生産・加工・流通に関する技術協力などが必要だと考えられた。

南城市は、ビクトリアス市と気候・産業が類似しており、同様の課題を近年克服してきた経験があり、市策としても国際貢献を打ち出していたことから、この事業が実施されるようになった。

わたしは、レキオウィングス現地駐在の倉田麻里さんから実際にお話を伺った。

ビクトリアス市は 1998 年 3 月に町からビクトリアス市に成長した。位置はネグロス島北部、空港から 20km、州都のバコロドから 35km、面積は 113.9㎢、人口は 8 万 8299 人である。

南城市とビクトリアス市は、空港が近いということ、サトウキビが主幹農業ということ、亜熱帯気候ということ、人びとがみな温かい性格ということなどの共通点をもつ。相違点としては、日本全体的にそうだが南城市は高齢化が進んでいるのに対して、ビクトリアス市は若い人口が多いということ、南城市は人口・面積が小さいのに対し、ビクトリアス市は人口・面積ともに南城市の 2 倍以上あるということ、南城市（沖縄全体的に）は台風が頻発しているのに対し、ビクトリアス市は台風が滅多に来ないということなどが挙げられる。

この事業の目標は、ビクトリアス市のアグリエコツーリズム政策（AET, Agri-Eco Tourism）が南城市モデルを活用して強化されることである。南城市モデルとは、地域ブランドを徹底的

に活用し、その地域ブランドを積極的に発信することによって「人を呼び込むまちづくり」モデルである。

成果目標はおもに 4 つに分かれていて、1 つ目は「AET の施策が強化」だ。AET に関するビクトリアス市の地域資源を明確化、ビクトリアス市関係者が南城市の地域ブランドをより深く理解、AET のストラテジーペーパーを策定、AET のアクションプランを策定などがある。2 つ目は「有機・自然農法農産物栽培体制の強化」で、農業普及員等現地専門家に対し研修、現地専門家とともに普及計画書の策定、各種マニュアルを作成などをおこなう。3 つ目は「農産物の販路の確立」で、マーケティング調査、現地専門家とともにオンサイトトレーニング、ビレッジマーケット、ウィークエンドマーケットの設置、農産物（おもにハーブの輸出についての検討などを実施する。そして 4 つ目は「パートナーシップ宣言の採択」で、本協力の成果を踏まえ戦略的なパートナーシップ宣言を策定することである。

南城市でも活動しており、おもに青年研修などをおこなっている。これまで計 3 回、30 人にのぼるビクトリアス市の職員・農家の方を南城市に派遣した。テーマは「行政マネージメント」「公平な教育の機会提供のための教育行政強化」である。

マリガヤハウス

崔月（CUI Yue）
葉政廷（YEH Cheng-Ting）

1980 年代から日本へ働きに来るフィリピン人女性の増加にともない、日本人男性との出会いが増え、両者の恋愛・結婚、そして両者間に生まれる子どもたち（JFC, Japanese-Filipino Children）も増加している。幸せな家庭を築いている家族が増えているいっぽう、なかには日本人の父親に養育放棄されるなどの理由で、精神的・経済的に苦しい生活を余儀なくされている子どもたちも多い。こうした子どもたちの人権を守る活動をする目的で設立された市民団体が「特定非営利活動法人・JFC ネットワーク」である。

JFC ネットワークのフィリピン事務所マリガヤハウスを訪問し、JFC の問題や活動について話を伺った。

JFC は大きく 3 つの問題を抱えているという。

第一に、経済的問題である。フィリピン、日本どちらに暮らしていても、母子家庭で、母親が無職であったり低所得であったり、父親もしくは両親に養育放棄されていることが多い。フィリピンに暮らす JFC の場合、社会保険システムの不安定さも加わり、母親が海外出稼ぎに行ったり、ほかに家族をもって別居したりし、子どもが非行に走る、母親に不信感をもつといった問題も起きている。いっぽう日本に暮らす JFC のほとんどが母子家庭で、生活保護を受給している。父親からの教育費支援もなく、学校、塾、旅行などに行けない子どもも多い。母子の言語障壁もあり、子どもの学力が低下したり、不登校に陥ったり、非行に走ったりすることもある。母親はまた、フィリピンの家族に送金しなくてはいけないというプレッシャーも抱えている。

第二に、精神的問題である。JFC の多くはアイデンティティ危機に陥っており、自己肯定感や自尊心が欠如している。

第三に、法的問題である。以前の国籍法 3 条では、結婚していない日本人の父親と外国人の母親をもつ子どもは、日本人の父親に生後認知されても、日本国籍を取得することができなかった。いっぽうで、胎児認知されたり、両親が結婚したりした場合には、日本国籍を取得できる。子どもが認知される時期や、両親が結婚したか否かで、日本国籍の取得に違いが出るのは差別であるとして、JFC を原告とする国籍確認訴訟が提起された。最高裁は 2008 年、国籍法 3 条を違憲とする判決を下し、これにともない国籍法も改正された。

JFC はつづいて、国籍法 12 条についても提訴した。日本人の父親と外国人の母親が結婚し、その後に子どもが日本国外で生まれた場合、子どもの出生から 3 カ月以内にその出生を在外日本大使館または日本の市町村役場に届けないと、日本国籍を喪失すると定めたものである。しかし、地裁、高裁ともに敗訴、最高裁でも上告棄却されている。

最近では、日本国籍をもつ、あるいは取得できる可能性のある JFC をターゲットにした悪質な職業紹介エージェントも問題となっている。日本で働けると誘うが、実際の労働条件や環境は劣悪で、パスポートが取り上げられているケースもある。実際に被害に遭った JFC や、その母

親からの情報を集約し、とくにフィリピンに暮らすJFC母子に対しての情報提供、日本で働く際の労働者としての権利や義務についての周知が必要だという。

マリガヤハウスで説明を受けたあと、わたしたちは2軒の家族を訪問した。1軒目のAさんは1999年、滋賀県に出稼ぎに来た際、日本人男性Bさんと出会い、フィリピンで子どもを出産した。2001年、Bさんが行方不明になり、マリガヤハウスに相談したという。2軒目のCさんは2001年、フィリピンで、日本人男性Dさんと出会い、2003年に子どもを出産した。しかし2007年からDさんと連絡がとれなくなり、翌年Dさんが死亡したと知り、2009年にマリガヤハウスに相談したという。どちらも狭い家で暮らしており、生活は厳しそうだった。

忘れてはいけない戦争

野田健斗（NODA Kento）

フィリピンが日本とアメリカとの戦争に巻き込まれたことを事前学習で勉強したことから、せっかく行く機会がにどのようなことが起きていたのかを日本人として知っておくべきであり、体験者に当時の戦争について聞きたいと思っていた。今回、リラ・ピリピナス（Lila Pilipinas）を訪れることができ、その思いをかなえることができた。そこで、レチェルダ・エクストレマドィラさん（リラ・ピリピナス代表）ナルシサ・クラベリアさん（体験者 87 歳）、エステリータ・ディさん（同 86 歳）、フェリシダダ・デ・ロス・レイエス（同 87 歳）さんたちに、1941 年から戦争終戦までのおよそ 4 年間、日本軍が占領した時期のフィリピンについてお話を伺った。多くのフィリピンの人びとが被害に遭い亡くなったという。

リラ・ピリピナスの活動内容は、カウンセリング、国際・国内キャンペーン活動、訴訟、一時的に住めるシェルターの提供、生活保障、女性たちの体験を教科書に記載するようフィリピン、日本の両政府に訴えることである。メンバーは 20 人ほどいる。リラ・ピリピナスでとくに力をいれているのは、被害者へのカウンセリングと訴訟、フィリピン政府への生活保障や教科書への記載である。

わたしたちはまず、北部ルソンのアブラ州サンファン町におけるナルシサさんの体験を伺った。1943 年、彼女が 14 歳のとき、突然自分の村に日本軍が来て、父親がどこにいるかと訊かれた。そのときは父親が不在だったため、一緒に探させられた。日本兵、父親とともに家へ戻ると、子どもの数を確認された。父親は、子どもは 8 人だが 1 人は別のところに行っていていないと答えた。すると、日本兵は怒り、父親をロープで階段に縛った。その後、父親は銃剣で皮膚をはがせれながら拷問に遭った。母親は強姦され、小さい弟、妹の 2 人は殺された。ナルシサさんも兵士に傷つけられた。その後、連行される際振り向くと、日本兵が火を放ち村が燃えていた。このできごとで父と母、2 人の兄弟が殺された。

駐屯地では、強姦されたり、フィリピン人どうしで話していると殴られたり、昼間は料理をつくらされたり、洗濯をさせられたりした。夜ごと日本兵に強姦された。ナルシサさんは強姦した人の名前をいまでも覚えているという。駐屯地で偶然、彼女は姉に会った。そのとき、ひどいあざだったのできいてみると、日本兵にたばこの火を体に押しあてられたり、揚げたサツマイモを身体に押し付けられたりしたという。お互い生き延びることはできたが、ナルシサさんの姉は、いまもときどき、発作状態になるそうである。こういった人は現在でも多くいる。ナルシサさんも、このできごとをいまも忘れることができないという。

わたしは、ほかの人にも同様なことが起きていたことを知った。体験者たちは、日本政府に謝罪してもらいたい、歴史教科書に自分たちのことを載せて

ほしい、支援してほしい、事実を広く伝えてほしいと訴えられていた。

このような話を聞いて、日本軍が彼女たちにしてきたことは許されることではないことを知った。いままでは、当時の人がやったことだから関係ないと思っていたところもあったが、話を聞いて変わった。二度とこのようなことが起きないことを祈るばかりである。

また、フィリピンの教科書には、強奪や強姦があったことは記載されているが、慰安婦については載っていないことをきいて驚いた。レチェルダさんに若い現地の人は来ているのかを質問したところ、授業の課題の一貫で多くの学生が来ていること、その後、興味をもった人が繰り返し来てくれること、フィリピン大学などの学生も来ていることを教えてもらった。このようなことが起こっていたことを多くの人に伝えないといけないと強く思った。

これがアテネオ大学だ！！

藤綱ひなの（FUJITSUNA Hinano）
兵藤璃香（HYODO Rika）

アテネオ大学について

大学設立年は 1859 年であり、イエズス会によって設立された長い歴史と伝統を誇るカトリック系総合大学である。カトリックと教育が深く結びついた学校であるため、学生、教授ともに信仰の厚い人が多く、チャペルにはつねに祈りをささげている人がいる。

大学に通っている学生について

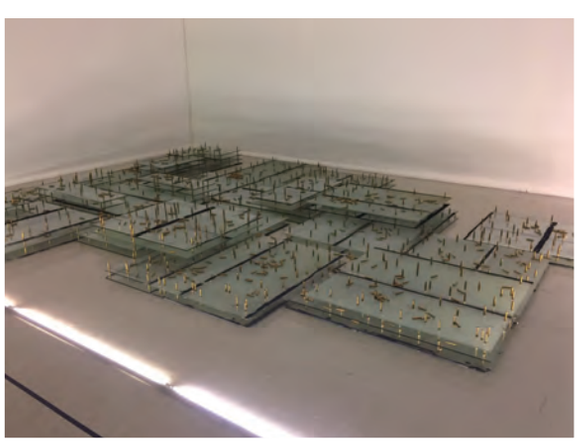
卒業生に大統領や政界のリーダーも多く世界的に有名な大学であり、警備が厳重であり、大学の駐車場に入る一番大きな門のところにも監視員が見張っているので、ほかの大学よりも安全である。学力が高い大学で、フィリピンの人にとって高い大学の費用がかかる（日本水準で 50 万～ 100 万）。よって、フィリピンのお金持ちの子どもが多いので、高級自動車に乗って登下校する学生が多く、きれいな服を着ている学生や Mac をつかっている学生がほとんどであった。学生同士の会話は英語であり、学力の高さがうかがえた。

敷地内と建物

大学の敷地内が広く、駐車場がとても広くたくさんの車が駐車している。そのため、朝 1 限の授業の場合たくさんの学生が登校するため、車が多く、朝は必ず校内で渋滞する。わたしたちのバスも駐車するまでに構内に入ってから約 15 分かかった。

広大な敷地内のためサッカーコートもたくさんある。芝生が多いため、スポーツをする環境は完璧に整っている。そのほかにアート博物館があり、芸術家がそこに展示している。銃弾がばらまいてあるアートやわたしたちの身長より大きい人の顔。槍にチェーンがついていてその先端に人の頭がついているなど、奇妙で不思議なアートがあった。2 階にはたくさんの本や古い貴重な本などが展示してある図書館がある。そこで学生が参考書を机に積み上げ、勉強をしていた。とても静かで、学生一人ひとりが勉強する環境をつくっており、勉強するのに完璧な環境である。

食堂と留学生との交流



屋外にあり屋根の下に屋台のようなかたちで食べものや飲みものを売っていた。値段は手ごろで、飲みもの 20 ～ 40 ペソ（およそ 40 ～ 100 円）、食べもの 100 ～ 300 ペソ（およそ 200 ～ 1000 円）である。この安さでもあり、勉強しながらご飯を食べていたり、楽しくお話ししながら飲みものを飲んでいたりする学生を多くみかけた。さまざまな国か

らアテネオ大学に勉強しにくる学生がいた。食堂で仲良くいろいろな国の人どうし英語で話していて、とても国際的な大学になっていた。自然と留学生とコミュニケーションがとれる環境ができていた。

教室

学生が勉強する教室は日本の教室と変わらず広くて、クーラーも完備されており、プロジェクターもあり勉強する環境は完璧であった。

授業内容

日本語授業を見学させていただいた。授業は日本語でおこなわれており、教員がおもしろく授業をしていて、学生が楽しそうに日本語で自己紹介をしていた。日本語の講義を受けている学生は約 10 ～ 15 人だった。7（なな）歳を（しち）歳と言って自己紹介をしていてるところを、教員が直していて、日本人も日本語が難しいと思うほど細かいところまで勉強していた。

プレゼン

わたしたちは学年ごとにグループをつくり、日本の夏・冬、日本のインスタントフード、地震についてパワーポイントで、プレゼンをした。アテネオ学生もフィリピンのインスタントフードについて、プレゼンをしてくれた。アテネオ学生のプレゼンについて、印象を述べると、プレゼンの内容が細かく区切られており、区切られた内容ごとに伝えたいことがまとめてあるうえに、説得性のあるスピーチだった。インスタントフードの実物をもってきて、実際に手で触れられるようになっているなど、下準備がしっかりできていて工夫されていた。

しゃべり方にも強弱がつけられていて、おもしろく聞くことができた。伝えたい内容が多く、わたしたちにとっては早口に聞こえ、すべて聞き取ることができなかったが、わたしたちのためにここまでのプレゼンを用意してくれたのはうれしかった。ここでも英語の表現力の高さがうかがえた。

留学生から伺った話

夕食会で中央大学や、大阪大学から留学している方がたと話をした。話によると日本人留学生の寮はとてもきれいなところを用意してもらっているそうで、テレビ、クーラー、冷蔵庫が完備されているという。

長期留学や短期留学の学生も多く訪れるそうだ。また、日本のような大規模な授業はなく、少人数（20 ～ 30 人）でおこなわれている。

授業は、グループワークやパートナーと一緒に問題を解決していくことが多いそうなので、授業中に自然とグループで身につくそうである。

集中的に講義を受けたい人には、短期間レッスンができる大学のシステムが整っている。ビジネスに必要な知識など、卒業後に活かせる講義もおこなわれているとのことである。

第三章　参加者の感想

多くのことを学んだフィリピン
～感じた異文化と人との交流～

野田健斗（NODA Kento）

はじめてフィリピンに行って多くの驚くことや学ぶことがあった。行くまでのフィリピンのイメージは経済発展が著しいので、ビルも多くきれいになっているというものだった。しかし、実際行ってみると、大きく違っていることを知らされた。まず、マニラでの活動で印象に残っていることは、とくに低所得地区ナボタス、マリガヤハウスでの JFC、太平洋戦争被害者のお話の 3 つである。

ナボタスを訪れたときは、臭いがすごかったことや小さな場所に多くの家と人が住んでいたことがとても印象に残った。また、インタビューした家族から 1 日 2 食しか食べることができなず、子どもに欲しいものを買ってあげられない、1 日 250 ～ 300 ペソ（日本円で 500 ～ 600 円）で生活をしていることを聞き、自分は恵まれていると感じたのであった。家のなかも狭く、4 人家族で 1 部屋のみで生活をしていることや、台所や窓もなく暑く生活するのは大変だとも感じた。なぜここで生活しているかと聞くと、仕事があるからと言っていたので地方にはあまり仕事がないことを知ったのだ。

つぎに、マリガヤハウスの JFC への活動を聞いたり、実際にその親子に会って話をさせてもらったりした。フィリピンの女性と日本人の男性のあいだで生まれた子どもが、父親と連絡がとれず、援助もなく生活に困っている現状、少なからぬフィリピンの女性が偽造パスポートで日本に行っていることも知った。また、1 回も父親の顔をみたことない子や日本国籍が取れないなどの問題があることを知って驚いた。父親探しをマリガヤハウスというところが支援していることもはじめて知ったし、場合によっては裁判を起こすようなことまですることにも驚いた。

3 つ目の太平洋戦争被害者の方がたの話を聞いて、戦争の怖さや二度としてはいけないことであることをあらためて感じることができた。話をしてくれたひとが当時のことをいまだにはっきり覚えていることや家族と離ればなれに突然なってしまったこと、暴力を受けたことなどを話している最中に泣いておられるのをみて、やりきれない思いをわたしは感じた。

つぎに訪れたネグロス島では、いくつものバナナやサトウキビ農園を訪れたり、青年海外協力隊のもとおこなわれている事業を見学したり、植林やホームステイを体験したりした。農園では、とても広く歩くのが大変であったが、現地の人びとが料理を出してもてなしてくれたり、そこでつくっているバナナなどのフルーツを食べたりすることができた。どれも口に合うものでおいしかった。また、はじめてサトウキビをがじる体験をすることができた。噛む

のは結構大変だったが、本当に甘いことを知った。バナナやサトウキビは有機農業でつくっているので、体にも安心できるものなのでいい方法だと思った。日本にも輸出しているので日本でも食べたいと思った。

イカウアコの事業では、津波の被害を抑えたり、魚やカニなどがくるようにして地元の人の暮らしを安定させたりするために、マングローブを植えていることを知った。はじめてマングローブの植林もしてみた。結構楽しくやれたが、植えても 20％ほどしか大きく成長できないという現実も知ることになった。

ホームステイ先では、温かく迎えてくれて楽しく過ごすことができた。山のほうに行って温泉に入ったり、バーベキューをしたりした。すごくもてなしてくれて、毎日食べてばかりだった。英語はほとんど話せないので、コミュニケーションをとるのは大変だったが、わかろうとしてくれたり、丁寧に説明してくれたりしたのでうれしかった。日本の食べ物についてや暮らしについていろいろ聞かれたので、興味をもってもらえてうれしいし交流することができた。英語をもっと学んでからまた訪れたいと思った。フィリピンについてはこのツアーでいくまでとの印象が大きく変わったし、いい経験になった。今後はフィリピンのみならず多くの国について学びたいと思った。

If I have a free time, I want to go back to the Philippine. I think I could had a valuable and unforgettable experiences. But, I felt, I have to study English. I am not good at English. I also think I want to study Philippine culture.

フィリピンの歴史と人びと

斉藤匡平（SAITO Kyohei）

わたしは、今回のフィリピン・スタディーツアーが初海外である。いま思うと自分でもなかなか度胸があったと思う。授業である程度予習をしたが、正直まったくといっていいほどイメージがわいていなかった。なのでフィリピンに行くことよりも、下級生と仲良くできるかというほうが心配だった。3年生だけ人数が少ないので孤立してしまうとずっと思っていた。そしていざフィリピンにつくと、仲良くすることよりも、佐竹先生の説明や移動についていくのがとても大変だった。また、日本と違い道路が舗装されていなかったり、車やバイクが多すぎたりしてびっくりした。絶対事故が起こると思っていた。しかし、2週間、事故は一度も起きていなかった。感心した。フィリピンの人はクラクションを駆使して危険を回避していた。日本も見習うべきだと思った。

初日のマニラ市の観光では、日本人がいかにフィリピンの人にひどいことをしたのかをみせてもらったのを覚えている。日本が戦争中（1941 ～ 1945 年）フィリピンを占領した際、イントラムコスのサンチャンブ要塞を刑務所としてつかった。近くを流れるパッシグ川の潮位が上がると刑務所に水が流れ込む。抗日ゲリラの容疑で投獄された多くのフィリピン人は溺死する。とても恐ろしいことを日本人はおこなっていたことを確認した。

2日目にストリートチルドレンを支援している施設を訪問させていただいた。そこでは、みんな無邪気な子ばかりだったのを覚えている。

3日目は、アテネオ大学へ行った。人生初の英語でのプレゼンテーションをした。どんなことを話したかほとんど覚えていない。しかし、アテネオ大学の学生が笑ってくれたのはよく覚えている。そこで思ったのが、やはり自分はもっと英語を勉強しておけばよかったということである。その後、授業を見学させていただいた。そこで、たまたま隣に座った人が日本のアニメが好きな人だった。わたしは英語が話せなかったので、日本語でいろいろ質問をしてしまった。が、いやな顔をせずにわかる範囲でアニメの話をすることができた。さらにそこから、日本のアニメが好きな女の子2人も交じってとても楽しく過ごすことができた。英語は話せなかったが、楽しかった。いまでは、フェイスブックで連絡をとっている。

4日目は、マリガヤハウスに行った。そこで、JFC の問題に触れた。実際に話を伺った。日本の父親が無責任だと感じた。

5日目はナボタスを訪問した。第一印象は汚い。しかし、そこで暮らす人びとはみんな仲が良く助け合って生きているように思えた。1日に日本円で50円ぐらいの生活と聞いたときは驚いた。

6日目は、日本の兵隊によって強姦された方がたから話を伺った。話を聞いていると、人間がすることとは思えないようなことばかりだった。話してくれた方は涙を流しながら話をしていたのを覚えてい

る。彼女たちは、日本にこの事実を認めてほしいと訴えている。

マニラ最終日の自由行動で、わたしたち３年生は馬車の運転手にぼったくられた。わたしはこのときとても激しい怒りを覚えた。いまも怒っている。

次の日からは、ネグロス島に行った。マニラとは違い地方の感じで都市という感じではなく、砂糖農園というイメージが頭に残った。オルタートレードの話を聞かせていただいたり、実際にサトウキビの収穫をさせていただいたりした。ごはんがとてもおいしかったのはいまでも忘れない。

また、イカウアコでは植林活動をさせていただいた。マングローブをみるのがはじめてですごくテンション上がった。植林をやってみた感想は、終わりのみえない作業だということだった。実際に役に立っているのか不安になった。しかし、話を聞くと少しずつ効果が出てきていて、漁ができるようになったと聞いた。すごいことだと思った。

最後は、ホームステイをした。ここが一番記憶に残っている。話ができないことはとてもつらいと感じた。必死に伝える姿勢をみせることが大事だと学んだ。ホームステイ先には本当によく世話をしてもらって、家族の温かさを感じた。タガログ語も教えていただき、とてもうれしかった。いつでも帰ってきてと言われた。泣きそうになった。また会いたいと思う。

スタディーツアーに参加して、フィリピンにとても興味をもった。また、人とのつながりをつくるのが楽しいと思えるようになった。

I joined the Philippines study tour. I felt that the Philippines is a country where a people are cooperating with eath other very much. The difference between the rich and poor is big. The meal are very good. I felt that it was fun to experience a different culture. The Philippines is my 2nd home. I will go to the Philippines again. Thank you very much.

２年前と比べたフィリピン～後悔と発見～

榊原寿成（SAKAKIBARA Hisanari）

２年前の 2014 年にもこのスタディツアーに参加し、今回が２回目である。２年前に訪れたときは、はじめての海外留学ですべてのことが驚きの連続だった。2016 年のマニラでは建設中の建物が多く都市化していっている地域もあれば、２年前と変わらない地域もあった。目にみえる貧富の差が広がったのか、縮んだのかわからなかった。

イントラムロスでは自分がみる限り意味のない工事がされていて、２年でこんなに変わってしまうのかと実感した。KPAC のハリエットさんに再会し、元気に活動されている姿をみると、２年前とは違った支援方法はないかと考えさせられた。マニラのペンションに変わりはなかったが、ロビンソンモールからペンションに帰る途中の道も建物が変わっていて一度迷ってしまい、雨のなか、現地の人に道を尋ねながら帰ったことは忘れられないだろう。

ナボタスやマリガヤハウスを訪問したときには、人びとやスタッフの方がたが自分のことを覚えていてくださったことがとても嬉しかった。日本人スタッフの河野尚子さんからマリガヤハウスの夏のインターンシップにもお誘いをいただいたので、友人を誘って行くことを考えている。現地で合流した山本泰裕（国際文化協力学科３年）がマリガヤハウス付近で犬のフンを踏み移動中のバス内がとても楽しかった。２年前にマリガヤハウスを訪問したときも、１つ上の先輩がマリガヤハウス近くで犬のフンを踏んだ。

マニラで後悔したことがひとつある。２年前には乗らなかった馬車に乗ったことだ。乗る前に料金を聞くと 50 ペソ（約 115 円）と言ったので、いい思い出と思い、友人を入れ３人で乗ったのだが、目的地周辺になり１人 1500 ペソ（約 3450 円）と言われぼったくられた。馬車を降りると馬にチップをくれと言われた。こういった経験ははじめてだったため、数日間イライラしたが、こんなことも思い出としてつぎに行ったときは乗らないようにしようといまでも思う。

ネグロス島ではイカウアコのマングローブ植林体験とホームステイが印象に残っている。マングローブを植えることで魚やカニなどを捕まえて生計を立てることもでき、津波などを軽減してくれる。しかし、180 本植えても 20％ほどしか大きくならない。ゴミなどが引っかかり枯れてしまうからだ。マングローブのメンテナンスやモニターすることが重要である。自分たちの植えたマングローブがどこまで大きく育ったか、数年後に確認に行きたいと思っている。マングローブの植林体験は楽しむことができたが、植林体験前の竹でできた橋を渡っていくのに緊張した。なぜなら、古い竹や新しい竹で組まれているからだ。新しい竹の足場は強度があり頑丈だったが、古い竹の場所は竹が折れかけているところもあれば、折れているところもあった。

ホームステイははじめてで緊張とワクワクが止ま

らなかった。Wi-Fi はなかったがとても充実した２泊３日だった。普段日本にいてもスマートフォンばかり触っていることが多いのでスマートフォンがなくても生きていけるし、Wi-Fi がなかったからこそ多くのことを学べたと感じている。ホストマザーがやさしかったのだが、緊張と隣に日本人がいたことの恥ずかしさで英語があまり話せなかったことが後悔である。もっと勉強して再会したいと思う。ホームステイ中に黒い人影の霊的現象がみられたので、自分個人としてはかなり興奮した。2 年前もペンションで同じような霊的現象がみられた。充実した 14 日間だった。

Thank you everyone. I'm glad I had a rare experience. I want to thank to the pepole who gave me good memories. Even when we stay in Japan, we hope to continue to do something. I want to visit the Philippines in the future. I'm thinking of going to Maligaya House for internship in Manila and join mangrove plantating activity in Silay, Negros.

印象フィリピン

崔月（CUI Yue）

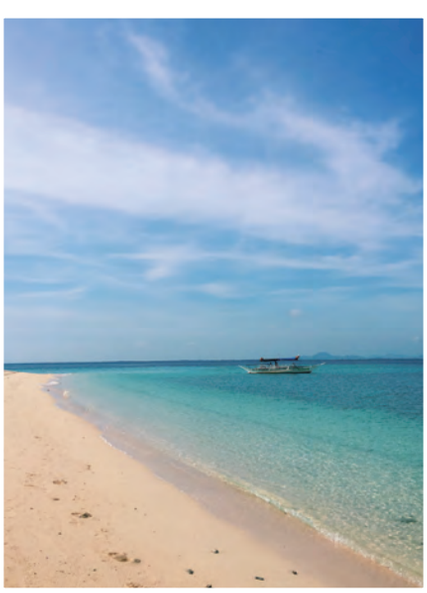
わたしはこのスタディツアーを通して、フィリピンに 14 日間滞在することができた。人生の思い出もひとつ増えることになった。

フィリピン行く前に、親は強烈に反対した。理由はそのとき、中国とフィリピンとのあいだにトラブルがあって、ニュースやインターネットなどの情報によると、フィリピンに対してとても悪いイメージをもっているためだった。親の関係で、心が揺れることもあったが、せっかくの機会、どうしてもフィリピンに行ってみたかったので、スタディツアーの参加を決意した。

はじてフィリピン人とかかわったのは、フィリピン領事館でビザを取りに行ったときだ。わたしは中国籍なので、ビザの申請がとても大変だった。まず名古屋から大阪まで行かなくてはならない。書類の準備も必要だ。大阪の領事館に行ったら、働いているスタッフはまったく日本語を話せなかった。スタッフはみな、英語で仕事しているそうだ。わたしは英語が苦手で、伝えたいことも伝わらないので、とても困った。幸い、同じくビザを取りに来た在日フィリピン人に通訳してもらった。こうして、ビザは無事に取得できた。いまもあのお姉さんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

8 月 16 日にフィリピンのマニラ市に到着した。1 日目からショックを受けた。いまもはっきり覚えている。それは、わたしたちが晩ご飯に行くときだった。レストランの前に、花をもって売る子どもがたくさんいた。見た目は 3、4 歳くらいだった。花をもっておらず、手を出してお金を乞う子どももいた。わたしたちが食事をするとき、窓からずっと物欲しそうな目でみていた。同じ人間なのに、はじめて激しい貧富の差を感じた。マニラに滞在しているあいだ、ほぼ毎日このような光景をみた。この世界にご飯が食べられない、飽え死にする人がいるということは嘘ではない。わたしたちはどのくらい幸せなのか、周りの人たちに伝えたい気持ちでいっぱいだ。

マニラについで、シライ市に向かった。マニラと比べて豊かな町だった。農民が多く自給自足の生活で過ごしているそうだ。わたしたちも何軒かの農園を訪ねた。農民たちはとても暖かくご飯を準備してくれた。質問にも、まじめに答えてくれた。



ここでの一番の思い出はやはりホームステイだ。ホームステイのママと家族たちはとても優しく、さまざまな食べものを食べさせてくれた。海をみたいと言ったら、車で 6 時間の距離にもかかわらず、連れて行ってくれた。残念なのは、わたしは英語が苦手で、会話がなかなか通じなかったことだ。しかし、言葉が通じなくとも、家族はみな、わたしに対してとても暖かく接してくれた。短い時間だったが、一生忘れることはないだろう。

わたしは日本に帰って、親にフィリピンのことをたくさん話

した。親もフィリピンに対する偏見はなくなったようだ。このスタディツアーを通して、自分は成長したと思う。参加したのは正解だと思った。

I went to the Philippines and I had a happy summer vacation. I can go to many places to gain more experience, increase my knowledge and touch new things. Thank you for my host families, blessings them along the way care. Thank you to everyone whom I met in the Philippines. Take care.

パンフレットには載っていないフィリピン

古川茜（FURUKAWA Akane）

このスタディツアーは、わたしにとってはじめての海外だった。わたしにとっての海外は、旅行のパンフレットに載っている、海外のいいところのみだった。しかしこの講義をとり海外の悪い側面、旅行パンフレットには載っていないような海外を知ることができた。

はじめに、わたしたちはフィリピンの首都マニラに行った。マニラといえばフィリピンのなかでもっとも栄えている街で、高層ビルやさまざまな施設などの建設も進んでいる。日本で都会といえば東京だ。東京といえば高層ビルが建ち並び、舗装されたきれいな道路、街が並ぶ。わたしは、都会といえば東京のような街並みを想像していた。しかし、わたしがマニラでみたそれは、日本の東京の街並みとは違った。マニラの街には高層ビルがたくさん建っていたが、道路は日本ほどきれいに舗装されておらず、車で走るとその状態の悪さがよくわかった。そして街を歩くたび、物乞いを何度もされた。都会で栄えているところなのに、物乞いをする人たちがたくさんいたのだ。かれらは仕事を求めマニラにやってきたのに、マニラでも仕事がなく、物乞いになってしまったのである。日本でも路上生活者をみかけるが、マニラでの物乞いの多さには驚いた。

マリガヤハウス

マリガヤハウスでは JFC の子たちの話を聞いた。JFC の子たちの生活の大変さや苦悩を知ることができた。そしてそうした現状をつくり出すのに、わたしたち日本人が大いに関わっているということも知った。父親に認知してもらったとしても、父親が不在という家庭が多く、母親だけで家計を支えている。そのため学校に通えないなど、さまざまな問題がある。その生活から脱するために日本国籍を取得しようにも、それにたくさんのお金がかかるため、その日暮らしの生活ではそちらにお金を回すこともできない。わたしたちが最後に会ったムスリムの少女は、日本の国籍を取得するにも期日が迫っていた。

わたしたちはマリガヤハウス訪問でこういった現状を知ることができた。そしてただ知ったのではなく、かれらの力になるためにボランティアや、かれらのことを伝えていくのも大切だと思った。

ネグロス島　農園訪問

ネグロス島に行ってからは ATC に行き、活動を聞き、それから 2 つの砂糖農園を訪問した。ネグロスでは 1900 年代はじめ、地主が農業労働者を雇い、多くの農業労働者は低所得の状態におかれていた。しかし現在は農地改革や ATC の活動や、政府、企業からの支援により、生活が豊かになってきている例もある。農場もとても広く、家の屋根を修理したり、農機具を購入したり、子どもたちが、中学、高校へと通えるようにもなった。

ネグロス島ではシライ市に滞在したが、マニラとは違い、物乞いは一度もされなかった。しかし貧富の差は目にみえるようにあった。農園の人たちの家はあまりよいものではなかった。とく

にトイレにはとても驚いた。水も入っているだけで、流れないし、ただただトイレの便器だけが置いてあるだけだった。そして農園の人たちは、お金がかかるからという理由で有機肥料を利用しているが、砂糖農園を所有している中流階級の人に聞くと化学肥料を利用しているとのことだった。意識の違いもあるが、このようにフィリピンでは貧富の差をよく目にした。

最後に２泊３日のホームステイがあった。もう結構疲れていて、人見知りでもあるため、はじめはホームステイが億劫だった。コミュニケーションも英語で、わたしはあまり英語が話せないので伝えたいこともしっかりと伝えることができず、自分から会話を広げるということもできず、自分の無力さを実感した。

ほかにもこのスタディツアーではたくさんのことを学び、知ることができた。そして、それとともに、自分の無力さも実感した。この現状を知ることはできても、わたしたちは何もできないからである。しかし、それを伝えていくことはできる。わたしが伝えたことがほかの人へと伝わり、その人たちがボランティアをしたり、支援をしたりすることもできるかもしれない。わたしたちができることは小さいことかもしれないが、何もしないより、何かしたほうがかれらのためになると思う。このスタディツアーでの経験は一生忘れないものとなった。

Japanese people have “Omotenashi mind.” And, Fillipino people have “Omotenashi mind”, too. I felt that Fillipino people have a sense of hospitality. For example, they served me a lot of dishes, took me to a lot of places. I got a lot of “Omotenashi” from them.

わたしを変えたスタディツアー

清水侑未（SHIMIZU Yumi）

スタディツアーに参加したのは、観光では知ることができない人びとの生活や問題を知ることができると思ったからだ。観光でしか海外に行ったことがないのでは国際協力学科を専攻している意味がないし、ひとりで海外ボランティアに参加する勇気がなかった。だからスタディツアーがちょうどいいとも思っていた。

開発途上国を訪れるのは今回がはじめてだった。大学での講義、テレビやネットなどの情報から「途上国」のイメージはついていた。マニラの宿泊ホテル周辺や訪問地の移動のあいだに路上生活者や物売りの姿を目にしても（ああ、いるなあ）くらいのことしか思わなかった。マニラの街を歩いているとほんの小さな子どもが夜の遅い時間まで花を売り歩いていた。その子どもが近寄ってきて「１ペソ、１ペソ」と花を買ってくれるようアピールしてきた。ほかにもショッピングモールのエスカレーターの下で待ちかまえ物乞いをする小さな女の子に出会った。

写真や映像で子どもが物売りをしているところを見慣れていたり、風景としてみていたりしても、実際に自分がそのような場面に出くわすのとでは全然違うということを身に染みて感じた。一番感じたことは困惑だった。いままでの人生で物乞いされたことがなかったし、ここでその子に１ペソあげたところでたいしたものは買えない。ねだれば人からお金をもらえるということを覚え、習慣化してしまったら一生そういう生活しかできなくなるかもしれないし自立できない。お金をあげることは長い目でみればかえってこの子のためにならないかもしれない。しかし無視するのも罪悪感がある。ホテルに戻ってからも悶々とした気持になってしまった。

いままでは第三者として客観的に傍観することしかなかったが、スタディツアーはいやでも現実と向き合いそのことに直接関わっていく。講義でフィリピンの人の苦しい生活を知識として知ることができたが、それについて大変だなあ、と思うことしかなかった。しかし、実際に目の当たりにするとさまざまなことを感じ考えることができた。フィリピンで聞いた音や嗅いだにおい、目にしたこと、味わった食べ物、自分の手で触れたものから、座学では得られないことをたくさん学ぶことができた。フィリピンで過ごした２週間は濃密でとても長く感じたし、あっという間だった気もする。

フィリピンで過ごすときに気をつけていたことがいくつかある。一つ目はこまめに記録をとること。毎日違う訪問地に行き、たくさんの話をきいた。日本に帰るころにはすっかり忘れるだろうから、話の内容はもちろん学生の質問やその答えも記録し、毎日日記をつけるようにした。二つ目はなんでもチャレンジしてみること。これはおもに食事のとき心がけた。いろんな種類の食べ物をとりあえず一口は食べてみた。気になっていたバルッ（balut、孵化直前のアヒルの卵をゆでたもの）もチャ

ンスをみつけて食べてみた。バルッはおでんの卵のような味がした。ただ白身が異様に硬くて食べるのを断念した。三つ目は写真をとることに気をとられ過ぎないようにした。写真を撮りすぎると、そのとき時の記憶が逆に薄れやすいと聞いたことがあるからだ。その真偽はさておき、自分の目でみて脳裏に焼き付けておきたかったからでもある。四つ目はできるだけいろんな人に話しかけるということ。わたしは英語に堪能ではなく話しかけることが苦痛でもあった。英語が得意な子にフォローを入れてもらったり、誰かにくっついて話しかけたり、姑息な手段をつかって話をするうちに、ちゃんと自分の力で会話したいと強く思うようになった。日本に戻ったらもっと語学の勉強に力を入れようといままで以上に強く思った。

　このスタディツアーで開発途上国に住む人びとの暮らしをまぢかに見ることができ、いろんなことを感じた。この貴重な体験を忘れず日本でも生活していきたい。

What I like about the Philippines is that people have a lot of energy. Filipinos under all circumstances always smile. I'm extremely grateful that I met many people in the Philippines. They were very kind and talk to us about various things. I will never forget about my travel to the Philippines as long as I live.

ストリートチルドレンと出会って

山本良介（YAMAMOTO Ryosuke）

わたしは 8 月 17 日に、スタディツアーのプログラムの一環として、フィリピンの首都マニラにあるストリートチルドレン保護団体である NGO 団体カンルンガン・サ・エルマを訪問した。

カンルンガンの施設は、人通りが比較的少ない閑散とした路地にあった。自分は子どもたちのための運動場などがある日本の保育園のような場所だと想像していたが、自分が想像していたのとは違い、施設の外見は簡素であったため、驚きを感じた。

建物の構造は縦長であり、屋上を含む 4 階建てであった。2 階の寝室にはベッドが 16 個あり、16 人の子どもたちが寝ることができる。屋上は広場で、子どもたちの遊び場と黒板が設備されており、学習の場として使用されている。広場は、学生 16 人と教員 2 人、カンルンガンのスタッフの方がたが入っても半分の余裕があったので、広いなという印象を受けた。

わたしたちがカンルンガンを訪れた際、子どもたちは、下は 5 歳から上は 13 歳の男女の子が計 11 人、暮らしていた。その 11 人のうち 2 人だけが 10 歳以上であったため、高学年層より、低学年層の子どもたちの方が多いという印象を受けた。男女比は男子より女子の方が多かった。

わたしたちははじめに、カンルンガンについての話を聞くために屋上の広場に移動した。移動して、子どもたちがわたしたちのために準備してくれていた歌とダンスを披露してくれた。子どもたちがたくさん練習したのだな、とみてわかるほど、素晴らしいダンスや歌のできばえで感動した。なかには、発表中に集中が途切れてしまい、遊んでしまう子どももいたが、それもまた、愛嬌があり子どもらしさを感じることができた。全体的に、とても楽しい披露であった。

子どもたちの披露のあと、わたしたち学生も日本の伝統舞踊である盆踊りを、扇子やうちわをもち、子どもたちやカンルンガンのスタッフの方がたに披露した。練習不足なこともあり、上手にできるか不安だったが、うまく踊ることができ、子どもたちやスタッフの方も喜んでいたのでとてもよかった。そして、盆踊りを披露したあとに子どもたちが「一緒に踊ってみたい！」と言ってきたので、つぎは子どもたちを混ぜて一緒に盆踊りを踊った。一緒に踊ったことや、子どもたちが積極的でフレンドリーであったこともあり、わたしたちと子どもたちとの距離が一気に縮まったような気がした。

わたしはカンルンガンを訪問する前までは、子どもたちと仲良くできるかどうか心配だった。わたし自身、日本でさえ児童年齢層の人と関わる機会がないに等しく、子どもへの接し方もよくわからない。ましてや、ことばが通じないフィリピンの子どもと仲良くなれるか、交流できるか、かなり心配だった。そして、子どもたちが元ストリートチルドレンということもあり、過去に親や周りの大人たちから虐待を受けたことがある子どももいるかもしれない、そ

れによりナーバスな子どもが多く、自分の振る舞いにも気を付けなければならないのかと心配していた。しかし、実際の子どもたちはとても活発、積極的で人懐っこく、カンルンガンを訪問する前までわたしがもっていたイメージとは 180 度違い、明るくて元気な子どもたちだったので、とても驚いたとともに安心した。結果的には、子どもたちと仲良く交流できて楽しめたのでとてもよかった。

日本にも NGO 団体は多くあり、そのなかにも児童支援をする団体もあるが、フィリピン NGO のカンルンガンのように、路上で生活している子どもたちを支援する団体はないと思われる。そもそも先進国である日本ではホームレスという存在は少なからずいても、ストリートチルドレンという存在はないといえる。実際にわたしは、日本ではみたことも聞いたこともない。

わたしはフィリピンに来た最初の夜、マニラではじめてストリートチルドレンを目にした。わたしが道を歩いていると、5 ～ 7 歳くらいの男の子が近づいてきて、手を差し伸べて物乞いをしてきた。その子は、わたしが無視して歩き続けても手を差し伸べてついてきた。わたしはずっと気づかない振りをして素通りをしたが、路上の子どもに何もしてあげることもできず、なんだか虚しさを感じ、いまでもそのことを鮮明に憶えている。

わたしはこのスタディツアー中にマニラで 4 回、ネグロス島で 1 回、ストリートチルドレンに物乞いされた。そしてどの時間帯も、小さな子どもが外を、大人の同伴なしで出歩くような時間ではなかった。ある子どもは摘んできたらしい花を渡してきたり、ある子どもは 5 ～ 6 人の集団で、一緒に遊ぼうという感じでこちらにちょっかいをかけつつも「お金をちょうだい」と手を差し出してきたりした。日本ではこのような光景はないのでとても衝撃を受けた。そして、日本はとても恵まれているな、と改めて強く思った。

わたしはフィリピンに発つ前までは、フィリピンにはストリートチルドレンが多いということに関して、軽く「そうなんだ」程度にしか思っていなかった。しかし、実際に現地でその事実を目のあたりにしたときに、はじめて深刻さがわかった。

カンルンガンのようなストリートチルドレン支援団体も、すべての路上の子どもたちを支援できるわけではない。支援から外れている子どもたちもたくさんいると思うと、カンルンガンのような NPO、NGO 団体がもっと増えて欲しいと思った。そして、少しでも円滑に子どもたちへの支援活動がおこなえるよう、カンルンガンのような団体を支援したいと思った。

I went to Kanlungan sa ER-MA in this study tour. It is a NGO that support street children in Manila. We listened to the orientation about their history and so on. Also, we played with children living in the center. It was a fun time. As a whole, we were able to have a good experience. I'll not forget this experence in Kanlungan.

讀萬卷書不如行萬里路的菲律賓
～百聞は一見にしかず～

葉政廷（YEH Cheng-Ting）

わたしが通っていたオイスカ高校では、フィリピンへの海外研修スタディツアーがある。4 年前に、わたしはフィリピンに行く選抜に落ちてインドネシアに行った。インドネシアの景色や文化を学び、たくさんの友だちができた。海外への視野が広くなったと感じ、もっと海外に行きたい、多くの経験をし、学びたいという気持ちが強くなった。それ以来、わたしはいつかフィリピンに行くと決心していた。今回、名古屋学院大学のフィリピン・スタディツアーでフィリピンに行くことができた。

今回の旅は、8 月 16 日からだった。ちょうど夏休みの最中で、わたしはいちど自分の母国（台湾）に帰った。フィリピンに行く前、わたしは両親からフィリピンの治安がとても危険であると聞き恐れた。わたしは、不安と期待とを抱いて、日本に戻って旅の準備をした。

8 月 16 日の朝、わたしたちが中部国際空港に集合して、フィリピンへの旅がはじまった。4 時間の飛行機の旅では、機外の乱気流が機内のわたしたちに興奮と緊張の気持ちを与えた。飛行機の小さな窓から外の景色をみて、フィリピンだ、これはフィリピンだ、興奮の気持ちが不安を包み込んでマニラに到着した。

マニラの空港は、国際空港にはみえなかった。小さな空港でたくさんの人がいた。自分の荷物がターンテーブルからゆっくりゆっくり出て来て、わたしの気持ちも落ち着いていった。いよいよ、わたしたちのフィリピンの旅がはじまった。フィリピンの天気は、わたしたちを歓迎して、喜んで泣いていた。わたしたちは雨のなか、マニラ市内を観光し、多くの歴史的な場所に行った。

マニラでの 1 週間、さまざまな場所を訪問した。もっとも印象に残ったのは、4 日目にナボタスを訪問し、住民に話を伺ったことである。ナボタスで最初に感じたことは、フィリピンの貧富の差だ。ナボタスの人びとは、フィリピンの社会で援助を受けるべきだと思った。

仲良くなったナボタスの子どもが、わたしにさまざまなことを教えてくれた。その子どもが、わたしにこんなことを言った。「ヨウさん、あなたご存知ですか？　わたしが住んでいる場所はきれいではないかもしれないけれども、わたしはここに住んでとても幸せだと思う。なぜならここには、わたしが一番大切な家族がいるから。わたしはここで楽しめることがあるから。わたしはこの世のなかで一番幸せだと思う」

わたしは、非常に感動した。わたしにとってあたりまえと思うのものが、こちらの人にとって大切なものである。たとえば清潔な水とおいしい食べ物などは、わたしにとってふつうのものであるが、かれ

らにとっては一番欲しいものである。わたしたちは、あたりまえと思っているのものをもっと大切にするべきではないだろうか。今回のスタディツアーから、わたしはたくさんのことを学んだ。また機会があれば、ほかの国にも行きたい。

I'm very happy that I can go to the Philippines with NGU. And I learned a lot of culture in the trip. I tried a lot of food. Before I went to the Philippines I would not eat any kind of fish. But after I went there, I am now able to eat fish. The people told me I should try anything and I learned many things. So l think I learned a lot in the trip.

元農園労働者の生活と民衆貿易と幸せと

横江勇哉（YOKOE Yuya）

サトウキビの島　ネグロス島

フィリピンでの歌と踊りと衝撃があふれる生活も 1 週間を過ぎようとしたころ、わたしたちは首都のマニラから、世界的なサトウキビ産業で知られるネグロス島のバコロドへと移動した。マニラでは、首都ならではの喧騒と渋滞、そしてストリートチルドレンをつねに感じていたが、ネグロスは飛行機でたった 1 時間の距離にもかかわらず、比較的静かで人びとも穏やか。なによりも、物乞いやストリートチルドレンをみかける機会が激減し、まったく別の国に来たような感覚であった。

元農園労働者の支援団体　オルター・トレード社

ネグロス初日は、オルター・トレード社（ATC）に行き、フィリピン、とくにネグロスにおける農業実態や活動などを学んだ。

フィリピンは歴史上長いあいだ、スペインやアメリカ、そして日本に支配された歴史をもち、農業の分野でも、小作人たちは地主による支配を受けていた。今日では、1988 年の農地改革の受益者となった小作人や農園労働者が、政府から 1 ～ 7 ヘクタールの土地を受け、さまざまな農作物を育てることも可能になった。

長い小作人時代が続いたフィリピンでは、サトウキビなど伝統的な作物以外の育てかたを知る人は少なく、商品作物なども他国から安値で買いたたかれてしまうのが現状である。ATC では、土地を得た元農園労働者に農業技術の指導や肥料のつくりかたのセミナー、収入がない時期のための低金利での貸し付け、学校など教育機関の敷設など幅広くおこなっていた。途上国の農園労働者と聞くと、ついつい学校に通えず、何時間も労働に明け暮れる「かわいそうな境遇の人びと」、そんなイメージを抱いている人も少なくはないのではないだろうか。実際にわたしもそのようなイメージをもっていた。

しかし、ATC などの支援団体のサポートにより、NAPFWA という農園組合では、62 人いる組合員のうち、ほぼ全員が高校を卒業していると伺った。農業に関する知識、どの成分が甘みを形成するのか、能率的な肥料づくりには何が必要で何が余分なのか、などさまざまなことを学問的にも経験としても理解していて、とても頼りになる方ばかりだ。農園労働者時代には 1 日働いてわずか 80 ペソ（約 195 円）だった収入が、現在では 200 ペソ（約 440 円）にまで上がったと語ってくれた。日本で生活するわたしたちからすると、冗談でも笑えないほど低い額だが、現地の物価などを考慮すると、なんとか暮らしていけるほどの額ではあるらしい。ATC の所長に聞いた話では、

労働者の基本的な考え方として「最初に自分たちが食べる分の作物をつくり、余ったものを市場などで売る」ということらしい。食物と金銭、どちらが優先性のあるインセンティブとなるかが、わたしたちと彼らの考えかたのあいだにある大きな相違点だろう。

民衆貿易　People to People

彼らの育てた作物は多くが ATC に送られそこを通して輸出、もしくは国内の市場などに送られる。サトウキビをはじめとしたそれらの野菜はすべて ATC の専門スタッフのチェックをパスしたものであり、高品質、有機栽培が保証されている。とくにサトウキビに関しては、ATC が特産品のマスコバド糖に加工し、国内や世界に出荷している。

そして、新鮮な野菜を提供するのが、ATC の開する新サービス、BOX である。BOX は、インターネットで ATC に希望の野菜の種類と数を送れば、自分の自宅あるいは近所の団体などに届く。野菜は全て契約農家から仕入れたもので、2013 年の開始以来、現在では 140 を超えるネグロスの企業や個人がこのサービスを利用している。

ホスピタリティーあふれる国民性

マニラでは毎日のように視覚的に新しい発見を繰り返していたが、ネグロスに移ってからは、現地の人の話などを通して新しい発見をしたのがおもしろかった。

とくに、農園労働者に対するイメージが大きく破壊された。フィリピンにおける農園労働者は国の最低賃金よりも低いと教わってきたが、それでもほとんどのケースが高校を卒業できるほどに発展した生活を送れているようで、よい意味で衝撃を受けた。

彼らの農業はトラクターなどを使用することはなく、水牛を用いた作業など伝統的な要素が中心となっていた。それでも、わたしたちが出会った農園労働者らは、ATC とともに農業知識をシェアしたり、災害が起きたら組合を超えて助け合ったり、見ず知らずの日本人がやってきても自分たちができる最大のおもてなしをしてくれたりなど、とても素敵なホスピタリティーにあふれた国民性をもっていると感じた。

現在、ATC の掲げる方針として、フィリピンをアジアにおけるオーガニックカントリーにするための技術支援がある。そして「すべての農家が無農薬の有機栽培をおこない、市場にもっと新鮮で高品質な野菜を出回るようにしたい」と ATC の所長も語っていた。ふつうなら、国を変えるようなことを小さな団体がおこなうのは到底達成しがたいと感じられるが、彼女のことばには、本当にできるのではないか、感じられるような説得力があった。今後もフィリピンの農業分野を見守っていきたい。必ず、フィリピンの農業は発展していくことだろう。

To my home mother and family. I am surprised at a lot of things, experience and your hospitality while I was in Neglos. There are bad traffic in Manila. In addition that's so noisy, but all of people whom we met were really kind. Of cource, you too. I glad to meet you, because I had good experience that we could not do in Japan. I want to say you again, we will never forget your hospitality. If we meet you again, I want to show you a lot of places, foods, and more.

はじめてのフィリピン訪問

藤綱ひなの（FUJITSUNA Hinano）

わたしにとって、今回のスタディーツアーがはじめての発展途上国への訪問だった。

まず訪れようと思ったのには２つの理由がある。１つ目は、その国の社会情勢を自分の目でみてたしかめたいと思ったからだ。２つ目は、わたしは海外の方と関わる職業に就きたいと思っているので、そのためにも言いかたは悪いが、先進国だけではなく発展してない影の部分も知っておきたかったからだ。

実際に訪れるまでのわたしのフィリピンに対するイメージは、貧しくてストリートチルドレンがたくさんいて、かわいそうな子がいて、汚いといったマイナスなイメージしかなかった。しかし、ナボダスという地域を訪れてみて、わたしの考えは変わったのである。そこで子どもたちと会うまでは、かわいそうだと感じるのだろうなと思っていたが、実際に足を運んでみるとそのような感情はいっさい芽生えず、みなが笑顔で楽しそうにしていた。スマホをずっといじっていたり、些細なことで悩んでいたりするわたしたちのほうが、よほどかわいそうなのではないかと感じた。

そして、お風呂でお湯が出ること。３食食べられること。好き嫌いして、お腹がすいたらコンビニに行く。学校へ行きたくないと思うこと。文字の読み書きができること。日本にいたらあたりまえに思うことが、世界の違う角度からみたら眩しいほど輝いている暮らしなのだと痛感させられたのである。ふだんなにげなくしていることをあたりまえだと思わずに感謝するべきだとも思わされた。

また、わたしは戦争被害者の方の話を聞き、Japanese Filipino Children、略して JFC と呼ばれる日本人とフィリピン人のあいだに生まれた子どもの家族に会った。今日、若者が戦争について関心がないというのが現状だ。自分たちには関係ないと思っている人が多いが、被害に遭った方はいまだに心に大きな傷を負っている。彼女たちは、わたしたちに話をしてくださっているあいだ涙を流していた。この光景をわたしはずっと忘れられずにいる。もう昔のことだからと思うのではなく、年に１度でいいから戦争のことを知る機会を学校の授業の一環として設けるべきだとも強く思った。

JFC についてははじめて知ることが多かった。JFC の多くは父親が日本人だ。フィリピン人女性を妊娠させておきながら逃げてしまう、自分の子どもだと認知しないということが多くあると聞き、日本人のしたことなので、自分には関係ないで済まされることではないと思った。

今回の経験をとおして、フィリピンをもっと知りたいとも、また身近な友だちにも話していきたいとも思った。そして、国際協力の現状を知ってほしい。お金を寄付してフィリピンに学

校が建てられたとする。学校があれば勉強できると考えるかもしれないが、実際はそうではない。学校に行く交通費がなかったり、両親がそろっている家庭でも貧しく、学校へ行く暇があったら働けと言われたりする子どももいる。寄付したら、建てたら終わりだと思わずに、その先を考えることも重要だと思った。難しいことだが、その現状を知ることができただけでも、何かをはじめるきっかけになったと思う。

　このスタディツアーは、日本にいたらまずできない経験や感情をもつことができるし、自分を見直すきっかけにもなった。2週間だったが、フィリピンを訪れてよかった。

I went to the Philippines and a sense of values changed. And I knew importance which lives in Japan. Local people in a place to visit and host family. Thank you for your hospitality to me who can’t speak English at all. I’d like to make use of this experience in Japan .

はじめてみる発展途上国

兵藤璃香（HYODO Rika）

わたしにとってはじめて行く海外でもある「フィリピン」。行く前、正直とても不安があり、けれどもはじめてのドキドキでもあり、向こうでの生活を調べたりした。初日久しぶりの飛行機でテンションはマックスだった。フィリピンという国を身をもって体験できるという、とても貴重なことに参加できることのうれしさもでもあった。

マニラ空港に着き、テレビでみたような空港の外で人びとがズラーッとこちらをみていて、少し怖かった。すぐにバスに乗り、リサール公園、イントラムロスに観光に行く途中、最初にみたフィリピンの現状は、道路の脇に寝そべっている人や、子どもが道路の脇でお母さんと何かを売っている、貧困の現状であった。それが２人、３人という数ではなく、たくさんいた。

イントラムロスは、まるで映画のなかに来たような世界であり、フィリピンの歴史や、昔の象牙でできた服などをみた。日本でときどき行っている教会とは違い、とてつもない大きさの教会を生ではじめてみることができ感動した。一見彫刻にみえる天井の凹凸が、絵で描かれてあると知り、こういう技術もつかっているのだなと思った。

はじめての海外での夜ご飯。ペンションの近くのレストランに行った。ガーリックのご飯、お肉と野菜が炒めてあるもの、酸味が効いたスープ。わたしはすべて口に合い、たくさん食べた。1 週間泊まる予定のペンションはとても落ち着ける雰囲気であった。シャワーは日本と違いお湯が少ししか出ず、少し不便だったが、とてもよい経験ができたと思った。1 日目でもあって疲れたのか、わたしはすぐ寝てしまった。

JICA では、フィリピンの方と観光客向けの商品をつくるという協力隊のお話を聞かせていただいた。やはり、たくさん問題点があるようで、技術が低くて、上手につくれない。素材が乏しい。怒って注意してしまうと、モチベーションが低くなり、作業をしなくなる。日本では考えられない問題点で、聞いているわたしたちも違いがすぐにわかり、とても興味深かかった。この問題点をどうにかしようと、「BAG DESIGN CONTEST」を開き、技術をあげたり、賞品を出したり、モチベーションをあげたり、デザインを見比べたりしているようだ。観光客に向けての商品づくりなのだが、まだまだ難しいようであった。

カンルンガンでは、ストリートチルドレンとして、つらい過去があるはずなのに、子どもたちがあんなに目が輝き、楽しそうにいきいき生活していたのが、わたしにとっては驚きであった。披露してくれたダンスからは、さまざまなものが伝わってきて、はじめてダンスで感情というものを感じた。そのあとみなで折り紙や、風船などで楽しく遊ぶことができた。なついてくれて短時間の遊びや、オリエンテーションだったが、やはり別れはすごく悲しかった。

アテネオ大学はとても広く、サッカー場もたくさんあり、きれいな芝生で整備されていた。調べていたときに知ったとおり、学内には車がいっぱいで渋滞したうえに、バスが駐まるまで時間がかかった。高級車がたくさん並んでおり、学生はお金持ちの印象であった。ミュージアムも学内にあり、わたしたちには理解しづらいアート作品がたくさんあった。一番驚いたのは、図書館

でアテネオ生が必死に勉強していて、満員であったことだ。日本でときどきみるような１人、2人、居眠りしている学生はなく、黙々と分厚い参考書を開いて勉強していた。

わたしたちは、アテネオ大学の学生にプロジェクターをつかって日本について説明したが、アテネオ学生の発表がすごくクオリティの高いものであり、流暢な英語であり、完全に圧倒されてしまった。アテネオ大学の学生にもプレゼンもろくにできないのかと悔しいことを言われたので、そこでまたひとつわたしが成長する課題が増えた。教室の勉強する環境もしっかりしていて、広い教室で勉強していた。日本のアニメと現代についての講義を少し受けさせてもらったが、わたしには難しかった。それに比べてアテネオ学生は的の射た質問をしていたり、他大学から来ている日本人留学生も自分が疑問をもったことをわかるまで先生に質問をしたりしていて、積極的に授業に参加していた。あの環境で勉強ができる学生をうらやましく感じた。

わたしがフィリピンでたくさんの体験をさせていただいて悲しく感じたこと、悔しく感じたことは２つある。お話を聞けてよかったことでもある。

まず１つ目のマリガヤハウスでは JFC に実際に会ってお話を伺った。どこにお父さんがいるのかわからなかったり、お父さんに連絡をしても無視されたりする家族がいた。日本の男性に怒りを感じた。どんな理由であっても、子どもがいる以上家族なのは間違いないし、それを放棄するのは間違っている。このことについて興味をもったので、自分にもこれからできることがあれば、お手伝いしたいとも思った。

２つ目は太平洋戦争の被害者のお話を本でもなく資料でもなく向き合って話を聞けたことだ。お話の一つ一つを大切に聞き、日本にもって帰らなくてはいけないものだと思った。非常に残酷なものであり、いまでも正直思い出すのがつらい。日本人がこんなことをしていたことをしてしまった事実を受け止めるのに必死であった。

２つのお話を聞き、自分のなかでフィリピンのイメージが明確なものになったし、考えかたも変わった。フィリピンに行くだけでなく、このような体験ができて、先生がた、両親に感謝している。今回の体験で多く成長できたと思う。フィリピンで体験したことを、フィリピンに行けなかった人、フィリピンの現状を知らない人に、教えたいと思った。よく聞くけどあまり知らなかった「オルタートレード」についても、とても興味があるお話であり、なにより生の声を聞けたことが大きかった。フィリピン以外にも貧困やそのほかの問題で困っている国もあると思うので、わたしにできる国際協力をしたいと思った。

I got a lot of experience and had great time. I'm glad to have met my host family. My mom always contact me, so I'm happy. I want to go to the Philippines again and want to meet her. I have grown mentally by visiting the Philippines. There were a lot of serious problems, but that gives me an oppotunity. I became interested in the Phillippines. I want to do some volunteer activities. か

明確に目の当たりにした格差

池谷けいと（IKEGAYA Keito）

フィリピンのスタディーツアーに参加して、いままでに経験したことのないことや、みたことのないもの、聞いたことのないことなどたくさんのことを学ぶことができた。

リサール公園とイントラムロスでは、第二次世界大戦中に日本が占領したときの話を聞いた。捕虜の殺しかたが本当に残酷で、聞いていて辛くなった。また、市民団体「リラ・ピリピナス」では、第二次世界大戦中に日本兵によって慰安婦にされた女性たちの話も聞いた。かなり昔の話なのに、涙を流しながら詳しくこと細かに話してくれた。それだけ彼女たちに一生癒えないような傷を負わせたのは、わたしたちの前の時代に戦争をしていた同じ日本人である。わたしたちが謝るのも違うとは思うが、過去の事実を知らないというのは罪だと思った。今回のツアーで聞かなかったら、本人たちから直接聞くような機会はなかったと思う。このまま知らないままにならないで済んで本当によかった。

Kanlungan sa ER-MA（カンルンガン）という元ストリートチルドレンの支援をおこなっている施設にお邪魔した。子どもたちが歌とダンスを披露してくれて、わたしたちが踊った盆踊りも一緒に楽しんでくれて本当にうれしかった。みんな夢をもって、希望をもって生活していて、なぜかわたしもがんばろうと思わせてくれた。1 人の男の子ととても仲良くなって、彼がベストフレンドと言ってくれたのは本当にうれしくて、一番の思い出になった気がする。

はじめてのホームステイでは、それまでにみてきた貧困層の暮らしと、富裕層の暮らしの差をみせつけられた。ご飯は豪華だし、おいしいお店にも連れて行ってもらった。いつでも電気はつくし、クーラーが効いていて部屋のなかは涼しいし、ウォーターサーバーでいつでもおいしい水は飲めるし、家にはプールがあるし、本当に豪華な生活をさせてもらった。ホームステイ先で体験したベリーダンスも楽しかった。ホームステイの期間は短かったけど、短時間で家族と仲良くなれて、たくさん話しかけてもらえて幸せだった。

街の様子や、人びとをみているだけでも、いままでみたことないものをたくさんみることができた。車が窮屈そうに走っているところ、その車のあいだを歩いてドライバー相手にものを売りつけようとする人、木陰や路上で生活している人、一目でわかる生活水準の格差など書ききれないほどにみるだけでも経験になったことは多かった。

日本人のわたしの常識だけでは理解できないことばかりだったが、少しでも受け入れることでその人たちにはその人たちの事情があって、フィリピンの人にはフィリピンの人の常識があるということがわかったのが、なによりも大きな経験になったような気がする。

今回フィリピンに行ったことで、自分が知らな

かったことやみたことないものにたくさん触れることができた。いろいろな国に行ってみたいという好奇心は膨らみ続けている。

I was able to have a precious experience in the Philipines. My life in the Philippines was 2 weeks, but I had fun. Thank you to my Filipino parents, my Filipino friends, classmates, Prof. SATAKE Masaaki and SAEKI Natsuko and all of the people who help me. I am happy because I came back to Japan in good spirits. I woud like to study more from now on.

フィリピンを訪れて気づいたこと

礒田将成（ISODA Masanari）

僕にとって、今回のスタディツアーはとても意義のあるものとなった。まずはじめに車の多さに驚いた。フィリピンではつねに渋滞するほど交通網の整備ができていないと感じた。ガイドも渋滞により 1 日 20 億ペソの経済的な損失を出していると言っていた。僕は、海外といえば広い道路で日本と違い、スムーズにドライブができると思っていた。

このスタディツアーでは、本当にたくさんの地域を訪れ、たくさんの人たちに出会えた。とくに事前学習で担当した国際協力事業団（JICA）の訪問がより強く心に残っている。JICA は政府開発援助（ODA）の実施機関である。僕たちの税金が ODA として発展途上国の支援につかわれ、大規模なインフラを開発するというお話で、事前学習のときにも感じていたが機会がなければ知ることのなかった内容ばかりだった。

JICA 訪問時に聞いた片木真理子さんのお話で、国際協力についていままでよりも理解ができたし、今後どうあっていくべきなのかを考えさせられた。僕は、国際協力には相互理解が必要であると考えている。国際協力をする側が積極的でも、される側はどうだろうか。する側だけ満足してしまうこともあるはずだ。デザイナーの片木さんはフィリピンのシキホール島で国際協力事業に携わっており、住民とコミュニケーションをとりながら、島のブランドを活かした商品を考えてつくっている。しかし、島の人が素人であったり、仕事に対して意識が低かったり、お金は欲しいが現状に満足していたりと、さまざまな問題を抱えており、必ず役に立つとは言えないとおっしゃていた。国際協力の難しさがよく伝わってきた。どのように国際協力をするのか、どのような目的をもってするのかがとても重要だと感じた。

JICA を訪問した日の午後にはカンルンガンを訪れ、ストリートチルドレンと日本のおもちゃで遊んだ。子どもたちはとても楽しんでくれた。たくさん遊んで僕はバテバテになってしまった。そのあとに子どもたちが僕たちにダンスと歌を披露してくた。釘付けになるくらい心に染みた。僕たちは盆踊りを披露した。一緒になって踊ってくれた。カンルンガンの子どもたちも支援されていると、僕たちにはわからない問題や苦労をたくさんしてるんだと感じた時間でもあった。

このようなフィリピンでの問題などは、実際に現地に行きその場所でお話を伺うことをしないとわからないことがあり、自分自身も毎日が新鮮で新しい発見がたくさんあった。

このスタディツアーでは 1 週間マニラで過ごし、もう 1 週間はネグロスで過ごした。ネグロスではホストファミリーと一緒に過ごせたのが一番の思い出だ。英語が話せなくてたくさん迷惑をかけたが、とても暖かく接してくれたり、たくさんの料理をごちそうしてくれたり、いろいろなところに連れて行ってくれたり、翻訳アプリをつかいながら多くのプライベートのことを話したり、本当の家族のように過ごせた時間はとても幸せなものになった。フィリピンの文化や背景、さらには人の温かさが感じられた 2 週間だった。

新しい宗教、文化、生活に触れてみて

真神ベアトリス（MAGAMI Beatriz）

わたしが日本以外の国に行くのはこのスタディツアーで２回目だったが、はじめて海外に行ったのはまだ幼いときで、どういう感じだったかあまり覚えてない。しかし、高校のときからいろいろな国の文化などに興味があり、大学に入ったら多くの国に行きたいと考えていた。名古屋学院大学に入学し、スタディツアーのことを知り、日本以外の国のことを知りたい、みてみたいと思っていたので、このツアーに参加した。

フィリピンに行く前は、事前学習でストリートチルドレン、低所得収入層について調べていたので、ストリートチルドレンがたくさんいることや、低所得者が多いということはわかっていた。しかし、実際に行ってみると、想像していたのとぜんぜん違い、こんなにも道で生活している人はいるし、ストリートチルドレンも思っていた以上にたくさんいた。空気も臭く、渋滞もすさまじく、ゴミだらけ、道路整備も完全にできていない状態で、フィリピンに行っていなかったら知ることができなかったことがたくさんあった。

低所得地域に行き、実際に現地の人にお話を聞くこともでき、いろいろなことを知ることができた。そして、どれだけ日本が裕福な国であるかを知ることができた。

そのほかに農園視察にも行った。そこでは農民の人のお話を聞いたり、食事を振る舞ってくれていろんな料理を食べたりすることができた。みたこともなければ食べたこともないフルーツがさくさんあって、食わず嫌いなわたしだが、いろいろな新しい食べ物に挑戦することができとてもよかった。

このスタディツアーで、わたしは文化や生活の違いを学ぶことができた。この 13 日間は、わたしにとって忘れられないものになった。まだまだ世界について知らないことが多くあり、ここで学んだことを忘れずに発展途上国のことを知らない人に知ってもらえるようにしていきたい。

I've learned a lot and experienced so much in this study tour. All of them changed my way of thinking. I was able to communicate with people who have different cultural back ground. This study tour was a life changing experience for me. I learnd that there is a big gap between our life style in japan and the hard life of low-income families in the Philippines. I want to share my experiences and observation with other people.

わたしが感じた日々の綴り

岡本大介（OKAMOTO Daisuke）

国際協力学科という名に惹かれて入学した直後、１年生からフィリピンへ実践的実習ができる授業があると聞き、オリエンテーションを受けてすぐ履修した。春から出発の８月までフィリピンの基礎的な知識から日本との友好関係における歴史まで､佐竹先生を中心に学んで来たため、出発前でもうすでに表面的なフィリピンに対するイメージをもってマニラへ向かったが、街へ出て一瞬で僕の想像していたものをはるかに超えていることに気づいた。バスで移動中、水を手売りしている老人、街中そこらを歩き回る野良犬。バスのなかからみえる景色だけで、相当なカルチャーショックを受けた。

マニラでは国際協力をしている組織、JFC（Japanese Fillipino Children）を援助している団体を訪問したり、太平洋戦争被害者のお話を伺いに行ったりした。

日本人である僕らが知らなくてはならない問題がたくさんあるように感じた。太平洋戦争中に日本兵に強姦をされた女性の話を聞いているとき、涙を流されながら自身の体験談を語られてる姿は、日本人である僕たちにとってはとても心の痛んだ時間だった。

マニラにつづいて、飛行機に乗って１時間移動したところにあるネグロス島を訪問した。飛行機からみえた景色は緑一色のサトウキビ畑で埋め尽くされていた。農園などを視察するたびに、バナナとマスコバド糖をつかったもち米料理をどこも出してくれるのはとても印象的だった。味も素晴らしかったのをいまでも覚えている。

農園も個人で運営しているものと団体で経営しているものとでは方針がまったく違い、それぞれのメリットがよくみえた。たとえば個人経営の農園のほうは、ひとりで管理する土地が多いため、土地に愛情が注がれ、細かな変化に気づきやすいだろうと思った。また団体のほうは人数が多く、人手が厚いので広い範囲にわたっての農園管理が可能であることが見受けられた。

今後ともに日本とフィリピンがよい友好関係でずっといて欲しいと心から思える研修旅行だった。

My theme of the Phillipine tour is forcus on “low-income area”. We had already studied that theme before deperture. But the reality was very different from what we studied. It makes me a lot of cultue shock with Japanese culture. I want to help their situation some way. Thank you.

フィリピン、知らなかった現状

山本大輔（YAMAMOTO Daisuke）

わたしは東南アジアが好きで、東南アジアの国ぐにに興味があった。フィリピンへ行くのは今回がはじめてで、ずっとフィリピンにも行ってみたいと思っていたので、とても楽しみだった。

東南アジアの国はいつもイメージしていたものと違うことばかりで、フィリピンも想像していたよりも都心部は栄えていて綺麗で立派な建物などが多く建っていて驚いた。

初日に訪れた教会は印象に強く残っている。日本にはない造りになっており、まるでハリー・ポッターの世界に迷い込んだかのような建物でとても興奮した。礼拝堂もとても広く天井には立体的にみえるような絵が平面に描かれていた。わたしは家がキリスト教で、幼いころからずっとキリスト教に関わってきたので教会もたくさんみてきたが、いままでみた教会のなかで一番素敵な場所だった。

フィリピンの食べ物もとてもおいしく、いろいろな種類のみたことのない食べ物が出てきて、毎日毎日食べるのにわくわくした。首都マニラでは意外と親近感のある食べ物が多く、泊まったペンションの朝ご飯に関しては、トーストにベーコンに卵という、とても一般的なザ・朝食という感じだった。後半のネグロスでは首都部から離れていることもあり、はじめてみる食べ物だらけだった。味も何かに似ているというものはあったが、食べたことないものが多く感じられた。路上に出てみると、さらに好奇心を揺さぶる食べ物がたくさん売られており、どれもとてもおいしかった。

フィリピンと日本の関係についてとくに印象に残っているのはフィリピン女性への過去の日本兵の行動だ。フィリピンと日本がどんな関係であったか、わたしはまったく無知だったため、とても衝撃を受けた。いまではそのようなことがなくなっているが、過去にはたしかに存在しており、過去の記憶として変えることのできないかたちで、いまも高齢者の方がたの頭のなかに残っている。涙を流しながら思い出したくないであろう辛い過去の話をしてくださった方がたをみて、加害者側であった同じ日本人としてとても複雑な心境だった。

JFC の話を聞いたときも、日本人のお父さんが自分の子どもを放って姿を消すというのは、どんな理由があろうとも無責任だと思った。日本人のわたしが言うのもなんだが、わたしはフィリピンへ行って日本人が少し嫌いになった。もちろん一部に限るが。そんな背景がありながらも、日本人のわたしたちを歓迎してくださった方がたに本当に感謝している。

ツアー後半はネグロス島へ行き、ホームステイをさせていただいた。お医者さんをしていて、口数の少ないお父さんのお宅だったため、第一印象としては少し怖くて不安でもあった。しかしお父さん側もはじめは緊張していたのか、慣れれば慣れるほどたくさん話すようになり、どんどん会話が弾んだ。温泉に連れて行ってくれたり、街を案内してくれたりしてとても楽しい時間を過ごせた。またいつかフィリピンに行った際にはホストファミリーに会いに行きたい。

第四章　ホームステイ先より

わたしの日本の娘へ

Maria Cristina M. Golez & Ma. Paz Cordura ×
兵藤璃香（HYODO Rika）真神ベアトリス（MAGAMI Beatriz）

最初に、短期間だがわたしたちの娘になる２人の美しい女の子、兵藤璃香と真神ベアトリスをみたとき、すぐに彼女たちがわたしたちの一員であることがわかりました。彼女たちは、素晴らしい笑顔、そしてとても幸せそうな顔をみせてくれました。彼女たちはどんな暮らしであっても、楽しんでいるようにみえました。

妹のマ・パス・コルドラとわたしは、彼女たちの世話をするお手伝いさんと一緒にゲストルームに泊まらせようと計画を立てていました。そうすれば、自分たち自身の場所をもて、リラックスできると考えたからです。しかし、ゲストハウスに連れて行ったとき、母性愛がもたげてきて、彼女たちを２人だけで置き去りにし、別の家で寝かせることはできないと考えたのです。わたしは、彼女たちにダメダメ、わたしと一緒に、わたしの部屋で寝ましょうと言いました。２人はわたしの寝室で過ごし、わたしは 80 歳の父親の寝室で寝たのでした。

２人には、フィリピンでのハッピーな大家族の生活について説明しました。わたしたちは家族がもっとも大切で、親も孫も同じ家で暮らします。わたしたちは一緒に遊び、一緒にご飯を

The first time I laid eyes on them, our two beautiful girls who were going to be our daughters in such a short time, Rika Hyodo and Beatris Magami, we instantly knew they belong to us. They have such great smiles and have very happy outlooks. To me, they look like happy kids who simply enjoy life, wherever it may take them.

My sister, Ma. Paz Cordura and I had planned to make the girls stay in our guesthouse with a househelp who will take care of them so that they could have the place to themselves and feel relaxed. However, when we brought them there, the maternal instinct in me kicked in and I just do not have the heart to leave them there by themselves, sleeping in another house, while I sleep in a different house just beside it. I could not imagine leaving them there and told them, no, no, no… you are going to sleep in my room and stay with me… and that is what happened! Both girls slept and stayed in my bedroom, while I slept in the bedroom of my 80 year old Dad !

We explained to the girls that life in the Philippines is one big happy family. Family comes first with us and that our elders stay in the same house with us as well as our grandchildren. We play together, eat together, go out as a family together, we do all things together, wherever or whatever that may be, and that is happiness to us! That even included our dogs, they are family members as well.

食べ、家族として一緒に出かけ、すべてを一緒にします。それが、わたしたちにとっての幸せなのです！　犬でさえ、家族の一員です。

彼女たちは、わたしたちからフィリピンの家族について多く学ぶことができたでしょうが、わたしたちも、彼女たちが若いときから働きに行くこと、生計を立てるため家族から離れることもあること、そうして学費を稼ぐことなど、彼女たちから多くを学ぶことができました。お互いの家族の話をし、彼女たちは喜ばしくも、わたしたちのライフスタイル、親を受け入れてくれました。それどころか、結婚した息子は彼女たちの兄になりました。子どもたちともまるで家族のように遊んでくれ、楽しそうでした。彼女たちの人生のひとときを、わたしたち家族と過ごしてくれているのをみるのは幸せでした。彼女たちがいることに慣れてしまったので、もっと長く滞在してほしかったです。

２人の日本の娘リカとベアトリスを忘れることはないでしょう。目に見えない結びつきがわたしたちにはあると思うからです。またすぐに帰ってきてね。あなたたちはいつまでも、わたしの心のなかにいます。あなたたちのことが大好きだわ！

The girls may have learned a lot from us as a Filipino family, but we learned a lot from them too. We learned that they go to work at an early age, and even leave the family home sometimes just to make a living, so that they could support themselves and their needs in school. We tell each other stories about our families, and I just love how they easily adopted to our way of life, to our elders, and even to my married son, who became their elder brother. They play with the kids in the family like they just belonged there and there was happiness in their eyes. I love looking at them having the time of their lives with our family. I wish they could have stayed longer because we gotten so used to having them around.

I will never forget my Japanese daughters, Rika and Beatris, because I felt there was this invisible bond tied between us. Come back soon my dearest girls. You will forever be in my heart! I love you girls!!!

Your Filipino Moms.

Maria Cristina M. Golez & Ma. Paz Cordura

日比ホームステイ見聞録

Maria Lina Gonzaga ×
崔月（CUI Yue）横江勇哉（YOKOE Yuya）

これは、わたしたちが受け入れた学生がいかにすばらしかったか、どのようにフィリピンの文化と実地に積極的に触れて楽しんだかを示す日記です。言語の壁があるにもかかわらず、かれらは自身の日本での話をしてくれたり、よい日本の子どもたちでした。親に対して素直で、この旅のために貯金をするべく必死で働き、新たな文化と伝統を学ぶことに意欲的で、身振り手振りや簡単な英語ではありましたが、その感情をよく表現してくれました。フィリピンでの経験、文化、場所を、まったく異なる文化から来た若者と共有するため、かれらの一時的な親、家族になれたことはすばらしいことでした。そして、かれらがナナイ（ホストマザー）に「本当に親切にしてくれてありがとうございます。また戻ってきます」と言ったのは、忘れられない思い出になりました。

2016 年 8 月 27 日（土）朝 5 時、横江勇哉と崔月は気持ちよく起きてくれました。わたしたちははじめ、かれらが白い砂浜のビーチに行くのに興奮しているのかどうかわかりませんでした（かれらはボラカイ島に行きたがっていました）。しかし、到着したとき、かれらは熱心

This is diary of sorts to show how wonderful our adopted students were and how willing both were to take in all that they could of Filipino culture and practices. Despite the language gap, they managed to share their own Japanese stories, they showed that they were good Japanese children - obedient to their parents, hardworking as they saved for their trip, willing to learn new cultures and traditions, and expressed their feelings very well through sign language and simple English. It was wonderful to be their temporary parent and family as we shared Philippine practices, culture and sights to two young people who came from an entirely different culture than ours and made memorable when the students said to Nanay, “thank you, very grateful for the hospitality, will be back.”

Yuya Yokoe and Yue Cui willingly woke up at 5:00 in the morning, Saturday – August 27, 2016. We did not know at first whether they were excited or not to go to the beach with white sand (both wanted to visit Boracay) but when we arrived, they eagerly took pictures and willingly took in the sights and sounds. It was their first time to ride a banca Philippine style. The boat was a canoe but the body was thrice the width of a standard canoe, it had bamboo slats as double flooring and sack canvas as overhead covers which were folded when the winds became too strong (this was to prevent the wind from blowing the boat

に写真を撮り、景色や音を楽しんでいました。かれらにとって、バンカ（フィリピンの伝統的な船）に乗るのははじめめてでした。バンカはカヌーの一種ですが、幅は３倍もあり、竹でできたダブルアウトリガー、頭上を覆う布袋（強風時にはたたんで、ボートが行きたい方向と逆に向かうのを防ぎます）がついています。また、サガイ市の条例によって、バンカには２つのエンジンを取り付けなくてはなりません。一方のエンジンが故障したときでも、もうひとつのエンジンが、わたしたちを安全に岸まで連れて行ってくれます。

最初に到着したのは、サヤック島マングローブ保護地区でした。樹齢数百年ものマングローブが台風ヨランダによってダメージを負いましたが、保護地区周辺はいまも美しく、水も透明で、よく保護されているようすが伝わってきました。入場料は、ひとりあたりたった30ペソ（約65円）です。「ゴミはもち帰ること」「騒がないこと」「鳥の邪魔をしないよう騒がないこと」「飲酒禁止」「ゆったり歩いて、幸福に生きよう」といったサインがありました。地元の木々の名前が、一般的な名前と学名とともに、手製の木の看板に記されています。勇哉と月は、澄んで、冷たい、マングローブの生えた水を楽しんでいました。

カービンリーフには８時45分に着きました。昔は満潮時の昼には消えていた白い砂丘が、長い時間をかけて、風や波によって堆積したものです。本島や近隣の人口密度の高い地域から、強風や波で運ばれるゴミで減少してしまいましたが、いまもサンゴをみることが可能です。白い砂浜、美しく透き通った水で、わたしたちは安全に泳ぐことができ、たとえゴーグルがなくても色とりどりの魚をみることができます。勇哉ははじめ泳ごうとはしませんでした。水着がなかったからです。それでも、彼は海に手をひ

towards the opposite direction of where we were supposed to go). Sagay City rules required that each banca is equipped with 2 engines so that in case one failed to work, there is still an alternative engine to bring us safely to shore.

First stop was Suyac Island Mangrove Preservation – some of the centuries-old mangrove trees were damaged by typhoon Yolanda (Haiyan) but the preservation site was still beautiful, the waters so clear and pristine which showed that preservation really worked. Entrance was cheap: 30.00 pesos per person. Signs like “Garbage in, Garbage Out,” “Reduce Your Noise,” “Birds are easily Disturbed, please reduce your noise,” “No Liquor,” “Walk Humbly, live Blissfully” The names of endemic trees were posted with common and scientific names listed in hand-made wooden signs. Yuya and Yue willingly waded in the clean, clear and cool mangrove waters.

Carbin Reef at 8:45 in the morning. The white sand dune that long ago used to disappear around noon time during high tide had increased by size through the years due to white sand deposited by the winds and tide. It used to be home to large big corals but garbage bought by strong winds and waves from the mainland and neighboring thickly populated areas have affected the corals but one can still find some live corrals. The white sand, clear, clean waters had a safe swim area where one swims with different colored fishes best viewed with googles although they can be seen even with none. Yuya did not want to swim at first as he had no swim wear but the water beckoned and he gave in to temptation.

かれるように、その誘惑に飛び込みました。月もまた海に入ることをためらっていましたが、やはり浅瀬に入り、貝などを集めて波にはしゃいでいました。獲れたての新鮮なカニが完璧に調理され、焼いた魚が届くと、かれらは健康な食欲をみせ、フィリピン・スタイルでカニを食べはじめました。勇哉は、カニ肉をとるのにフォークをつかっていましたが、カニの甲羅の上にご飯を載せて食べるという新たな方法を発明していました。月も同じ方法で食べ、ふたりともよく笑っていました。勇哉はまた、ティノラという魚のスープを、そして月は新鮮な焼き魚を楽しんでいました。昼の 11 時には、穏やかだった海が荒れはじめ、わたしたちは本島に戻ることにしました。2 時、シライに戻りました。勇哉は泳いだときに着ていた服のままでしたが、サガイ市に戻ったときには乾いていました。

シライ市の農場では、勇哉と月はほとんどの料理を試しました。オコイ（すりおろしたキャッサバと小エビと小麦粉につけ揚げたもの）、ルーガウ（ココナツ・ミルク、砂糖で炊いたモチ米、サゴ澱粉、四角く切ったサツマイモ、バナナ）、ボトオン、パパイヤとチキン・ティノラ（チキン・スープ）、チキン・アボド、バレンシアナ（ロー

He swam to his heart's content in googles and the shorts he wore as we traveled from Silay. Yue was very hesitant to go into the water but she also eventually waded in and gathered sea shells as she frolicked in the waves. When the freshly harvested crabs, cooked to perfection arrived with the grilled and tinolang fish, they both showed healthy appetites and learned to eat the crabs the way Filipinos ate them although Yuya used a fork to pull out the crab meat. Yuya invented another way to eat rice. He placed it on top of the empty crab shell. Yue followed suit and ate the same way as they both laughed while doing so. Yuya also ate fish "tinola" (soup) while Yue tried the freshly grilled fish. By eleven noon, the previously calm sea had become slightly turbulent so we decided to go back to the mainland. 2:00 pm, we were back in Silay and Yuya still wore the same pair of shorts he wore to swim, it had dried by the time we arrived at Sagay City mainland.

Silay City, at the farm in So. San Juan, Brgy. Guimbala-on - Yuya and Yue gamely ate most of the food on the table: okoy (grated cassava with tiny shrimps dipped in flour and deep-fried); lugaw (sticky rice cooked in coconut milk, sugar, with sago, rice balls, cubed camote and bananas); bot-ong, native chicken tinola with papaya, native chicken adobo, valenciana (local version of paella), native white sticky corn on the cob and fettucine in red mushroom and cheese sauce. Yuya had a long talk with Evelio, a male cousin who managed to converse with him via sign language and basic English about how to cook linugaw and produce coconut milk through the home-made grater.

カル・パエリア）、白いもちトウモロコシ、赤マッシュルームとチーズのフェットチーネ。勇哉は、いとこのエベリオと、リヌガウ（ココナツ・オイルでバナナ、イモ、豆を煮込んだおやつ）のつくりかた、自家製おろし器でココナツ・ミルクのつくりかたについて身振り手振り、簡単な英語で習いました。食後、すり鉢をつかって、「バエバエ」（ヤング・ココナツと米粉、トウモロコシを混ぜて棒状にしたお菓子）をすりおろすつもりでしたが、粉にするはずのご飯が炊けていなかったので、粉にする作業はなくなりました。勇哉と月は、いとこのスーザンの家にあるカラオケをみて驚いていました。勇哉は2曲歌い、ふたりとも疲れはて早く休みました。夜中、農園の涼しい風に加え、雨が降っていました。

8月28日早朝、ふたりはスーザンの家で早い朝食をとりました。日本ではあまり多く朝食をとらないと話していました。勇哉はランブータンをたくさん食べました。勇哉によれば、マニラではじめてこの果物をみて、農園なら無料なのに、高い値段で買ったとのことでした。その後マリスボッグ川に出かけ、岩がちでやや急な小道を歩き、冷たい川の水を楽しみました。かれらは、フィリピンの古い世代のように、なめらかな岩で肌をつるつるにすること、軽石で歯を磨くことを学び、なんと勇哉は試しもしたのでした。大きな岩に腰掛け、足を冷たい水にひたすと、魚がかれらの古い皮膚をついばみました（無料のフィッシュ・スパ）。魚につつかれて、ふたりとも笑っていました。

昼まで、ふたりはタリサイ市のRUINSで、より多くの文化を学びました。猛暑にもかかわらず、かれらは第二次世界大戦中に焼け落ちた豪邸のあちらこちらで写真を撮り、笑顔でポーズをとっていました。最後にふたりは、多くのフィリピン家庭がどのようにともに日曜を過ご

After eating, use of the mortar to pound “baye-baye” was supposed to follow but the rice was not pan-cooked before it was finely milled so no lusong actively. Rest time - Yuya and Yue were amazed to see a karaoke at cousin Susan’s house. Yuya sung two songs then both went to sleep early, tired and lulled to sleep by the farm’s cool night breeze, made cooler by the rains that came and went throughout the night.

Early morning - August 28, both had an early breakfast at Susan’s home and shared that they usually ate small breakfasts in Japan. Yuya ate a lot of rambutan. He said he saw the fruit for the first time in Manila and bought some for a high price while it was free at the farm. We proceeded to Malisbog river where both gamely traversed rocky, slightly steep paths and waded in cool fresh river water. They learned to clean their skin with smooth rocks like what Filipinos of our generation did. They learned to use soft stone (pumice) to clean their teeth and Yuya, the more adventurous, did try it. As they sat on the large rocks with legs dipped in the cool waters, the goldfish came and nibbled at their dead skin (free fish spa). They all laughed as their feet were tickled by the fish.

Before noontime, they learned more culture at the Ruins in Talisay City. They smiled, laughed and gamely posed despite the extreme heat as photos were taken of them at the various sites inside the mansion that was burned to the ground during World War II. Finally, they observed how many Filipinos spent Sundays together as families shared lunch at home or in restaurants after Sunday mass. At Ayala North District, Talisay City, both were game for

すか、日曜礼拝のあと家やレストランでともに昼食をとるのを観察しました。タリサイ市のアヤラ・ノース地区というモールのイエロー・キャブという店を楽しみました。ふたりは、ピザ、チャーリー・チャン・パスタ、ガーリック・チキン、ベイクド・ポテト、そして地元のソーラ・ティー（アップル・ティー）を試しました。その後、ふたりはウィンドウ・ショッピングに出かけ、勇哉はシャツを買っていました。

よく受け入れてくれるふたりに、わたしたちフィリピンのライフスタイルを紹介できたのは、本当にすばらしい経験でした。かれらは、わたしたちの生活様式を受け入れ、農園の親戚にも適応してくれました。かれらはよく笑い、さまざまな話をしてくれました。わたしたちも、食べもの、着物、美しい庭園のある家、雪、40 ～ 48 度にもなる猛暑の夏など、日本について多くを学びました。

わたしたちが受け入れた子どもたちは、豪邸に住む金持ちと、マニラの密集した地域の小屋に住む貧困層との格差を不思議に思っていました。かれらが何度もフィリピンを訪問すれば、この答えがみえてくるでしょう。かれらが、この格差について深く理解できるよう、ぜひ数年つづけてプログラムを実施してください。最後に、わたしたちと同じぐらい、日本の子どもたちが滞在を楽しんでくれたことを願っています。わたしたちは、かれらの短い滞在をずっと大切にするでしょう。わたしたちのアジアつながり、変化する文化が育まれ、有効の結び目が強められますように。そして、もちろん、わたしたちは、今後も喜んで名古屋学院大学のより多くの学生を受け入れるつもりです。

Yellow Cab where pizza, Charlie Chan pasta, garlic chicken, twice-baked potatoes and the local Sola tea were served. Both went window shopping afterwards and Yuya bought a shirt from one of the shops.

It was a truly great experience to share to these very receptive visitors our Filipino lifestyle. They easily blended in, accepted the way we lived and readily adapted to our relatives at the farm where they laughed and shared stories while my own family/clan learned more about Japan – the food, the kimono, Japanese homes with beautiful gardens, snow and the hottest summer with 40 to 48 degree temperatures.

Our adopted children wondered at the huge gap between the rich who had very large houses and the poor who lived in shanties and crowded homes in Manila. These can be answered if more visits are made. Let the program continue through the years so they would have a deeper understanding of the disparities. Lastly, we hope our Japanese children enjoyed their stay with us as much as we enjoyed their very brief visit which we will forever cherish. May our Asian ties and varying cultures be nurtured and the friendship knots strengthened. And yes, we are willing to host more students from Nagoya Gakuin University in the future.

隔たりに橋を架ける

Nenia P Coronel ×野田健斗（NODA Kento）

こんにちは、日本！　万歳！　わたしは野田健斗のホストマザーのネニア・コロネルです。わたしがはじめて、ホスト・ペアレントを経験したのは 2015 年 11 月でした。大阪の佐野高校の生徒でした。

日本の学生を受け入れたどちらの機会でも、わたしの家族は、日本とフィリピンは昔は敵だったが、時代が変わり友人となり、多くのことで協力相手になったと話しました。

わたしの夫アントニオは健斗のホストファザーになるのを楽しんでいました。わたしの娘のソフィアや息子のクリス（わざわざセブから帰ってきました）もまた、健斗の短い滞在が本当に記憶に残るものになるようがんばってくれました。

家族もわたしも、健斗との経験を楽しみましたし、大切にするつもりです。お別れの夕食会のあと、健斗と離れ、わたしたちはしんみりしてしまいました。でも、健斗が、もしフィリピンに戻ってくることができたら、また伺ってもいいですかと尋ねてくれたことがうれしかった。その答えはもちろん OK です。

隔たりに橋を架けてくれたみなさん、ありがとう。万歳！

Hello Japan! MABUHAY! I am Nenia P. Coronel the host mom of Kento Noda. My first experience of being a host parent was on November of 2015. The students were from SANO HIGH SCHOOL in OSAKA JAPAN.

On both opportunities of hosting Japanese students, my family would always tell them that Japanese and Filipinos were then the best of enemies. But, times have changed and both Japan and the Philippines are now friends and even partners in a lot of things.

My husband Antonio enjoyed being a host dad to Kento. My daughter Sophia and son CV (who came home all the way from Cebu) also did their best to make Kento's short stay with us really memorable.

My family and I enjoyed and will always cherish the experience we had with Kento. We were emotional when we left Kento after the farewell dinner. But we are hopeful when Kento asked us if he could still stay with us if ever chances would allow him to come back to the Philippines. The answer would always be YES.

So, to everyone who made this "bridging of gaps" possible a heart filled Thank YOU and MABUHAY!

第 2 の故郷より

YAP Family ×斉藤匡平（SAITO Kyohei）

テクノロジーが進んだ国である日本からの若者を受け入れるホストファミリーに選ばれたことは、とても光栄なことでした。

はじめは、文化や言語の違いから大変な仕事だと思いましたが、わたしたちが受け入れた息子・匡平は誠実で陽気で優しかったため、楽で実に楽しい仕事でした。匡平はフィリピン語だけでなくヒリガイノン（Hiligaynon）語も勉強してしまいました。匡平の知性と謙譲は、匡平にとって最大の財産でしょう。

匡平、あなたが、わたしたちと同じぐらい、わたしたちといるのを楽しんでくれましたように。いつでも、ここフィリピンにファミリー（Ponyet パパ、Gigi ママ、Manong CP、Gernel、Lola Letty）がいることを覚えていて。このささやかな経験は、本当によい、永遠の思い出です。

ホームステイの仲介役をしてくれたアンジェリン・ダアノイ・サタケ（Angeline Da-anoy Satake）と佐竹眞明（名古屋学院大学国際文化学部国際協力学科）の努力にも感謝の意を表します。

より多くのパワーと神の祝福を！

ヤップ家
ヤントラレシータアカデミー
1981 年卒業生

To be one of the chosen few tasked to serve as host-family of a young lad coming from Japan, a highly advanced technology country, is such an extraordinary and honorable privilege.

At first, we thought the task would be hard for us considering the divergence of our culture and dialect, but what made it effortless, and in fact facinating, is that KYOHEI, our foster son, is a down-to-earth, jolly and affectionate person. He managed to learn a bit, not only the Filipino language, but the Hiligaynon dialect as well. KYOHEI's intelligence and humility are his best asset.

KYOHEI, we hope you enjoyed our company as much as we did. Always remember that you have a family (Papa Ponyet, Mama Gigi, Manong CP, Gernel and Lola Letty) here in the Philippines. Let us wind by saying, this humbling experience will, indeed be, an enduring memory to us and our family.

Worth-mentioning, too, are the efforts of Sps. Angeline Da-anoy Satake and Masaaki Satake, Ph.D., Professor, Dept. of Int'l Cooperation, Faculty of Intercultural Studies, Nagoya Gakuin University of Japan for this successful undertaking.

More power and God Bless!

YAP FAMILY
STA -Batch '81

あなたたちのフィリピンの家より

Elaine Bobel Montelibano ×
榊原寿成（SAKAKIBARA Hisanari）山本良介（YAMAMOTO Ryosuke）

学生たちは立派で、提案されたことを尊重し、慣れていない異なることにも挑戦しようと努めていました。彼らは、この旅行を楽しむだけでなく、多くのことを学んだと思います。言語の壁を除いて、すべてスムーズに進みました。

提案させてもらうなら、将来的に学生が英語の短期講座を受け、ホストファミリーからより多くを学んだり、反対にホストファミリーが学生から学んだりできることを願っています。

わたしにとって、プログラムは成功でしたし、２つの文化のよりよい関係を築くことに貢献したと思います。

The students were respectful, very appreciative of what was offered to them and open to try different things they were not familiar with. I think they learned a lot from this trip aside from enjoying it. Aside from the language barrier, everything went smoothly.

May I suggest that in the future, the students will be given a brief course on the English language in order to learn more from their hosts and vice-versa.

For me, the program was a success and help foster better relationships between the two cultures.

2 人の社会的関心への気づき

Regio & Carla Sales, Gally & Josella Oropel ×
礒田将成（ISODA Masanari）山本大輔（YAMAMOTO Daisuke）

日本人訪問客をホストするのははじめてだったので、当初はためらいがありました。わたしたちに預けられる学生が、最小限の英語しか話せないと聞いていたので、コミュニケーションがとれるかにも不安がありました。それでも、この機会が日本人学生だけでなく、わたしたち家族にとっても学ぶ機会になると考えました。さらに、Google 翻訳などテクノロジーを駆使し、日本の息子たちと会話をすることで、その思いは深まりました。

ホストファミリーと学生たちの最初の対面となったシーフード・レストランでの夕食から、わたしたちは話しはじめました。つづいて、バコロド市庁舎周辺でデザートを食べたのですが、その間、お互いの家族のことや関心あることについて紹介し合いました。

翌日、わたしたちは、山本大輔と礒田将成を、サレジオ会のドン・ボスコ・スクール、ビクトリアス・ゴルフ場、世界的に有名な宗教芸術を展示していた聖ヨセフ勤労者教区教会など、日常行く場所に連れて行きました。昼には、子どもたちがドラムのセッションを楽しみ、ネグロスの伝統的な料理「チキン・アドボ」のレッス

Since it was our first time to host Japanese visitors, we had our initial reservations about the idea of hosting. This was also heightened by the fear of not being about to communicate with them because we had an initial information that the students assigned to us could only speak very minimal or rudimentary English. This apprehension was later abated when we have accepted this occasion as a learning experience, not only for the Japanese students, but also for our whole family. We also had added confidence when we tried to utilize technology, particularly the computer application Google Translate, conversing with our adoptive Japanese sons.

We started our conversations over a seafood dinner. This was followed by dessert in the Bacolod City Government Center area. Along the way we managed to exchange notes about our family background and personal interests.

The following day we tried to bring Daisuke Yamamoto and Masanari Isoda to the routine places where we do work, study, and worship. We brought them to Don Bosco Technical Institute of the Salesian religious congregation, the Victorias golf course, and the St. Joseph the Worker parish church which exhibited world-renowned religious art. At noon time of that same day the kids in the house had a short drumming session followed by a cooking lesson on how to cook "chicken adobo" a native dish in Negros. We then proceeded to

ンをしました。そのあとカンラオン火山の麓にある人気のリゾート、マンブカルで温泉を楽しみました。

ホームステイ最終日となった日曜日、大輔と将成は、地元の聖十字マリア宣教教会でのミサに参列しました。そしてお土産の交換をしたのでした。

彼らの来訪は楽しく、教えられることも多い経験でした。唯一の心残りといえば、親しくなり、お互いのことを知りはじめたところで、離れなくてはならなかったことです。ものの考えかたなど、より深く理解することができませんでした。送別会になってはじめて、彼らがより深く社会的関心をもっていたと気づかされました。

the popular mountain resort of Mambukal at the foot of Mount Kanlaon Volcano were our guests had a bath at the hot spring.

On the Sunday before we ended the visit, Daisuke and Masanari joined our Sunday Mass worship at our local seminary chapel of the Marian Missionaries of the Holy Cross. This was followed by exchange of gifts and souvenirs.

The visitation turned out to be an enjoyable and educational experience. But our only disappointment was that, while we were already gaining rapport and getting to know each other better, they already had to leave. Not really having gained deeper insights of each other's perspectives. It was only in the farewell dinner that we realized that our visitors had a deeper social concern that we had not really shared while they were with us.

新しい２人の家族

Bernie & Andrie Granada ×
藤綱ひなの（FUJITSUNA Hinano）池谷けいと（IKEGAYA Keito）

池谷けいと、藤綱ひなのの２人の日本人学生によって、すばらしい経験をしました。はじめてホストファミリーになり、彼女たちの期待に応えられないかもしれないと少し心配していました。あまり英語を話せない彼女たちとコミュニケーションをとるのは少し難しかったのですが、すばらしい時間を過ごしました。彼女たちも慣れるにしたがい、わたしたちの家族も彼女たちとの交流を楽しみました。

わたしたちは、ことばを交わし、お互いの文化を比較し、さまざまなレストランで食事をし、自宅で泳ぎ、シライ市とバコロド市に行き、ベリーダンスとジャズダンスの教室で一緒にダンスをして楽しみました。彼女たちは、フィリピン料理のアドボのつくりかたを学び、ティコイ、バチョイ、ルンピア、ソタンホン、パンシート・モロなどの料理を試しました。

２日間は短かすぎましたが、最大限楽しみました。この経験を忘れることはないでしょう。けいととひなの、佐竹眞明先生と佐伯奈津子先生率いるみなさんに会えた機会とすばらしい経験に感謝します。短いあいだでしたが、すばらしい瞬間をいつも大切にしていくでしょう。

We had such a wonderful experience to this two Japanese students Keito Ikegaya and Hinano Fujitsuna. Being first time host parents we were a bit scared since we might not meet to what they are expecting from us. We really did have an incredible time, though it was a bit difficult communicating with them since they speak only little english. But since they were easy to get along with even our family enjoyed their company.

We had fun conversing with each other exchanging words, comparing their culture from ours, eating out at different restaurants, went swimming at home, took them around Silay and a little of Bacolod, and even brought them to Belly and Jazz classes were they joined dancing and enjoyed a lot. They even learned how to cook Adobo a Filipino dish loved by everyone and tried eating different kinds of Filipino dishes like tikoy, batchoy, lumpia, sotanghon, pancit molo etc.

2 Days is too short but we made the most out of it. This experience will never be forgotten. Thank you for this chance and wonderful experience to meet Keito and Hinano and the rest of the group lead by Professor Masaaki Satake and Saeki Natsuko. We will always cherish this amazing moment we had with them even for a short time.

日本の息子を迎えた 3 日間

Tessie G. Jalandoni ×岡本大介（OKAMOTO Daisuke）

夫トニーとわたしは「息子」を、娘ケイと息子 AJ は弟を受け入れました。これから岡本大介について話していきます。

唯一悔やまれるのは、大雨のせいで、大介をもっと多くの場所へ連れて行けなかったことです。それでも、フィリピンのよいところ（おもてなし）を伝えることができたと思っています。短い滞在でしたが、大介は 2 つのホームパーティーに参加しました。家でパーティーをした際には、できるだけたくさんのフィリピン料理を出しました。大介はバルッ（フィリピンの伝統的な卵料理で半分ふ化した状態のもの）もトライしてくれました。バルッについて聞いてみてください。きっと大介は詳細に描写してくれるでしょう。大介はわたしたちの家族が多いことに楽しんでいました。

大介が滞在してくれたことで、異なる国籍をもつ人間として、わたしたちは違うこともにていることもあると気づきました。身体的特徴が異なり、信仰も違い、育った環境も違います。それでも平和、善意、理解を強く求めること、家族を愛することでは似ていました。

大介は「家にたくさんの植物があっていいね」とほめてくれました。大介のおかげで、庭に植物や木々がある価値に気づきました。わたしは、あたりまえのことだと思っていたのです。大介の言うとおり、わたしたちは恵まれています。これまでは木が美しいなんて気づきませんでした。日本の「息子」岡本大介、気づかせてくれてありがとう。

My husband Tony and I welcomed a “son” to our home last August 26, 27 and 28. So did my daughter, Kaye and son, AJ. They welcomed a brother. I am talking about Daisuke Okamoto.

The only regret that we have was that we weren’t able to bring Daisuke to more places because of the heavy rain. On the other hand, we made sure that we were able to convey to him the endearing trait of the Filipinos – our hospitality. Daisuke, in his short stay with us, attended two family parties. We tried to cook and serve all-Filipino food when we had a party at home. He even gamely tried balut. Ask him what it is and I am sure he will describe it in detail. Daisuke was amused by the size of our extended family.

Daisuke’s stay with us made me realize that as people of varied nationalities, we have different and similar qualities. We are different in physical appearance. We have different beliefs. We were raised in different environments. But on the other end of the line, we are similar in our strong desire for peace, goodwill and understanding. We are similar in our love for our families.

Daisuke said that we are blessed to have so much vegetation where we live. Because of Daisuke, I have come to value the plants and the trees at our backyard and outside the house. I may have taken them for granted. Daisuke is right. We are indeed blessed. And yes, I didn’t notice before but the trees are really beautiful. Thank you for this realization my Japanese “son”, Daisuke Okamoto.

資料

報告会の記録

わたしたちは、2016 年 11 月 16 日（水）にフィリピン・スタディーツアーの報告会を白鳥キャンパスのクライン・ホールでおこないました。スタディツアーは、2007 年に外国語学部国際文化協力学科ではじまり、2016 年で 10 回目を迎えます。報告会は、木船久雄学長による励ましの挨拶からはじまり、最後に木村光伸・国際文化学部長より、今回の報告を発展させて、充実した報告書を作成してほしい、というメッセージをいただきました。

フィリピン　スタディツアー

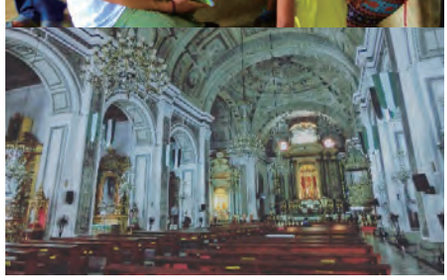
報告会

日時：11 月 16 日（水）10:55～12:25
場所：翼館 4 階クラインホール

8 月 16 日～29 日まで 14 日間、マニラ、ネグロスを訪れました！！

低所得地域で暮らす人たち・農民の生活・フィリピンの現状について

発表します。



★国際文化学部
　国際協力学科
★外国語学部
国際文化協力学科

おわりに

2007 年、外国語学部国際文化協力学科ではじまった国際協力スタディツアー。毎年、東南アジアの国を訪れ、2016 年で 10 回目を迎えた。今回の訪問先は 2007、12、14 年につづき、4 度目となるフィリピンである。3 年生 3 人、2 年生 6 人、1 年生 7 人、合わせて学生 16 人が参加した。マニラ首都圏と西ネグロス州をめぐる 14 日間の訪問だった。

今回のツアーでは 3 つの目的をもって、プログラムを企画した。協力、関係、交流である。「協力」とは政府や市民団体による「国際協力」活動の現場を訪れ、話を伺う。そして、自分ができることは何か、考えてほしいという目的である。「関係」とは日本とフィリピンとの関係について、思いを馳せてほしいという狙いである。日本と東南アジアの隣国フィリピンとのあいだには懸案事項もある。そして、「交流」とはフィリピンの人々と接し、人びとのやさしさに触れてほしい、という意図であった。

では、参加した学生はどんなことを感じ、どう反応したのだろうか。この報告書にも彼ら、彼女らの感想は記されている。ここでは滞在中、8 月 21 日マニラ、24、28 日ネグロスで行った反省会における学生の感想をまとめながら、それぞれの項目について、振り返ってみたい。

「協力」に関しては、青年海外協力隊員の苦労話を聞き、オルタートレードによる農民支援について見聞を深め、そして、イカウアコの事業地でマングローブを植えた。そうした体験を通じて、学生たちは協力の難しさ、ならびに大切さについて考えることができたようである。そして、フィリピンにおける貧富の格差を痛感し、日本にもどったら、なぜ格差があるのか、もっと勉強したいと述べた学生もいた。

「関係」については、今回、日本人の父親に養育を放棄されたジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン（JFC）の問題を知り、また、日本軍の侵略により被害を受けた方がたのお話を伺った。2 つの事柄に関して日本人学生はつらい気持ちになったという。そして、JFC については自分たちが恵まれていること、戦争被害者については涙を流して体験を語ってくれた女性の思いに寄り添うことが重要だ、という感想が出た。

「交流」に関してはこんな意見が聞かれた。マニラの低所得層の人びとは生活が苦しそうだが、明るく生きて、やさしそうな印象をもった、アテネオ・デ・マニラ大学の学生と話がはずんだ、ネグロスのホームステイ先で誕生日を祝ってもらい、温かいもてなしを受けた。英語力をもっと身に着けたいと感じた人もいたし、逆に交流したいという気持ちがあれば、意思がかなり通じたという声もあった。

こうみてくると、こちらが意図した 3 つの目的は一定達することができたかもしれない。そして、学生たちが訪問を通じて感じた疑問や、自分自身の課題について、今後どれだけ取り組んでいくか、わたしたち教員も見守りつつ、支えていきたい。

さて、報告書の副題は「知っているようで知らなかったフィリピン」である。学生たちは東南アジアの隣国について、ほとんど知らなかった。そして、2 週間の滞在で彼ら、彼女らは諸体験を通じて、知らなかった社会について少し知ることができた。さらに知るには日本に帰ってから

学習を含め、関わりつづける必要がある。その点、11 月 16 日の報告会で学部の学生や先生方に体験を伝えた。11 月 25 日の国際センターにおけるフード・フェスタではオルタートレードの無農薬バナナで春巻きをつくり、ふるまった。さらに滞在を振り返り、記録・感想をまとめて報告書もできあがった。これらの活動を通じて、学生たちはよりフィリピンを知ることになったと思う。これからも親しくなったフィリピンの人びとと交流を深め、末永いお付き合いをしてほしい。そのなかでフィリピンについてもっと知ることになるだろう。こうして、ツアーが学生たちの今後の糧となることを願っている。

今回も国際センター、国際文化学部長、外国語学部長をはじめ、多くのみなさまにお世話になった。フィリピンにおいてもたくさんの友人にたいへんお世話になった。同行の佐伯先生にも学生指導で尽力いただいた。みなさまに心の底から感謝申し上げたい。

2016 年 12 月
佐竹眞明

I would like to extend my deepest gratitude to our Filipino friends who kindly supported our study tour in 2016. Your assistance enabled our students to have valuable experiences and learn so much about the Philippines.
Maraming maraming salamat po at mabuhay kayong lahat!

December 2016
SATAKE Masaaki

『Republic of the Philippines ～知っているようで知らなかったフィリピン～』
2017 年 3 月
監修　佐竹眞明・佐伯奈津子
編集　学生編集委員
　　編集長　　山本良介
　　副編集長　横江勇哉
英語監修　メアリー・アンジェリン・ダアノイ
発行機関　名古屋学院大学　国際センター
　〒 456-8612　名古屋市熱田区熱田西町 1-25
　TEL　052-678-4093 / FAX　052-682-6824

Report on Study Tour to the Philippines 2016
organized by Department of International Cooperation, Faculty of Intercultural Studies,
Nagoya Gakuin University

Edited by SATAKE Masaaki and SAEKI Natsuko
March 2017
International Center, Nagoya Gakuin University
　1-25 Atsuta Nishimachi, Atsuta-ku Nagoya, Aichi, 456-8612 Japan
　TEL　+81-52-678-4093

Culture & Human Resources
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY